

鈍感男子へ想いをのせて  
て

紗英@Sae

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公、戸ヶ崎 和真は、花咲川女子学院に入学して、いろいろな人達を親友としていく。

その中でも、親友として思う人、好きな人として思う人がいた。

# 目次

## Season 1

出会い	1
自己紹介は嫌い。	5
なんか2人が少し怖いんだが。	10
花の少女とデート。	17
少女は暴走する。	25
同じ過ちはほしくないようにする。	31
復縁……？	41
依存	46
みんなで	56

## 優しさ

泊まりは理性が持たない

72

見知らぬ人にも声を掛けられる。

2度

も。

80

料理人はおたえさん。

87

感謝と至高の音楽

95

## Season 2

2年生になったの？早いね！

100

羽丘突入と幼馴染5人組？

108

いつも通りと最悪なスタート

116

新たに

125

暴走彩ちゃん

133

## Season 3

R o s e l i a × R A I S E A S

U I L E N の合同ライブに来てみた。

(特別編)

合同ライブ R A S の場合 |

148 141

## Season 1

## 出会い

俺の名前は戸ヶ崎 和真《とがさき かずま》。

この春から高校一年生になる。

俺が入学する高校は、花咲川女子学院だ。

ん？女子学院？

そう。名前は女子学院と入ってるが、今年から男子も入れるようになった。

まあ、そこに希望して入ったわけではない。

近くに高校がないから、そこにするしか無かったのだ。

しかし和真は単純に高校生活を楽しみにしていた。

---

「母さんおはよう」

「今日は随分起きるのが早いのね。おはよう」

そう。俺はいつも7時半か8時に起きるのが、今日は6時半に起きてしまった。

「まあ、高校入学するの楽しみだから。どんな人たちがいるのかなー」

「そう、朝ごはん出来るから食べるなら食べなさい」

「いや、まだいらナイヤ」

俺は時間を無くそうと、最近ハマっているゲームをやろうとする。

そう。CG4というゲーム機の「ヤングダムハーツ3」だ。

・・・飽きた。

俺は15分も持たずに飽きてしまい、もう一度眠ろうと決めた。

「高校生活、楽しみだな」

その言葉を静かに言って、俺はもう一度眠った。

目が覚めたら時計は8時になっている。

ベツトから降りて、制服に着替えて学校へ向かう準備をする。

母さんがテレビを見ていたので、準備をしながら見ていると

「女優の白鷺千聖さんが、アニメの実写化主演決定」

というニュースをみた。

「この人もすごいなー」

準備も終わり、俺は学校へ向かう。

「行つてきますー!」

高校生活三年間、楽しみだな!!

---

「俺のクラスはどこかな〜」

学校についてからクラスの紙を見てみると、

ドン!

誰かにぶつかってしまった。

「すいません!大丈夫ですか!?!」

?? 「ふええ… 大丈夫です…! ごめんなさい…!」

誰かにぶつかってしまった、入学する前に何やってるんだ俺は。と思い、謝った。  
そして少し経ってその子に

「クラス何組ですか?」

と俺が聞くと

「え!?! クラスは… B組ですね!」

「あ、同じクラスですね」

「本当ですか!? よろしくお願ひします…!!」

「あ、俺は戸ヶ崎 和真って言ひます。よろしくです!」

「戸ヶ崎くん、よろしくね。私は松原花音っていいます…」

そう話しているともう入学式が始まる時間だった。

「あ、もう時間だ! またクラスでね〜!」

「え!? もう始まつちやうよく!! ふえええ…」

(それにしてもさっきの戸ヶ崎くん、どこかで会った気がするな)

《プロフィール》

戸ヶ崎 和真 《とがさき かずま》

春から高校1年生。

過去に松原花音と会ったことが何回かある。本人は覚えていない。

とつても鈍感で、天然ジゴロ、とも呼ばれている。



# 自己紹介は嫌い。

(早く終わらないかな…)

そう思いながら、

今は入学式の、いや、全ての式においてほほほいらない校長の話を聞き流している。  
(そう言えば朝にあった松原さん、同じクラスって言ってたっけ。後で話しかけてみようっと)

「これで入学式を終わります…。」

やったね。やっと終わったぜ。

入学式が終わって

各クラスに戻り、もうクラスではグループができている。

あんたらなんでそんなに仲良くなるの早いの!?

と、疑問に思っていたら

「戸ヶ崎くん…!」

松原さんだ。やっと話す人ができた。

「あ、朝はごめん、俺が前に見てなかったから」

「ふええ… そんな事ないよ… 私だつて前見てなかったから…」

松原さんのふええつて口癖なのかな？可愛いな」

「えっ?!可愛いなんて… ふええ」

あ、俺声に出してた？やばいよ。入学初日に出会った人に可愛いなんて。

これもう女たらしじゃん。

そうしていると、担任が教室に入ってきた。

うわ、ババ a (おつと誰か来たな

「はい。このクラスの担任をします。白井 柚希《しらい ゆき》です。よろしく。早速ですが、このクラスの人には全員自己紹介をしてもらいます。」

なんでこんな事をしないといけないのか。

クラスで仲良くすれば名前くらいわかるだろ。

そう思っているといつの間にか俺の自己紹介という流れになっていた。

「えー、えー、えー、戸ヶ崎です。1年間よろしくお願いします」

…教室が静かになった。

だから嫌なんだ。

「君、僕と唯一の男子だね。今年の男子2人だけらしいよ。」

「は、はあ。そうなんですか。」

「僕は曾良（そら）。よろしくね」

「戸ヶ崎。よろしく」

この会話が終わると松原さんの自己紹介だった。

「松原花音です。：好きなのはクラゲです。：よろしく。：お願いします」

クラゲ好きなんだ。珍しい

そう言えば松原さんの少し前にいる「白鷺さん」って人、いないな

どんな人なんだろ。

そんな事より

周りに見ても女子しか居ないんだが。

俺の前にいる曾良以外。

やっぱり周りがほぼ全員女子って慣れない。

「自己紹介も終わったので今から1時間は交流を深めるために自由にします。けど教室

からはでないでね」

はーいとみんなが返事をする。

ま、話す人なんて松原さん、ぐらいしかいないな

「松原さん。」

「は、はい!!」

「そんな驚かなくていいよ、あと同級生なんだから敬語じゃなくていいよ」

「う、うん。そうだね。それで、どうしたの？」

「あ、そうだった。松原さんの少し前の席の白鷺さんって人、見たことある？」

「うん。あるよ。千聖ちゃんって言うんだ」

「白鷺千聖さんかー……。え？白鷺千聖!?!あの女優の!?!」

「う、うん!多分今日は仕事があるからお休みなんだと思うよ」

「ありがとう!白鷺さんと仲良くなれるかな？」

「多分なれるよ!千聖ちゃんは優しいからね。」

「うん!じゃあ今度3人でお昼一緒に食べよ!」

「え?お昼。。。?う、うん!千聖ちゃんがいいなら!」

「ありがとう!じゃあこれからよろしくね!」

今日は全然心が落ち着かなかった。

だって周りに女子しかいないんだもん。普通の男子だったらこうなってるよ。

「ただいまー」

「おかえり、ご飯もう少し待ってね」

「うんー」

俺は疲れて自分の部屋のベッドにそのまま倒れ込んでしまった。

戸ヶ崎 和真

鈍感男子。天然ジゴロ。

松原さんと曾良しか話さない。今は。

松原花音

過去に和真と会ったことがあり、その記憶が頭にある。

白鷺千聖

花音と同じく会ったことがある。しかし和真は覚えていない。

なんか2人が少し怖いんだが。

俺はいつも通り朝起きてきて準備をする。

「おはよう。学校には慣れた？」

「慣れるわけないだろ。周りに女子しかいないんだぞ。」

「そう、頑張りなさいよ」

何を頑張るのかは俺にはわからなかった。

「行つてきます」

そう家に言い、学校へと向かった。

(今日は白鷺さん来てるかな?)

そう思いながら学校へと向かっていると、

「戸ヶ崎くん、おはよう」

同じクラスの松原さんだ。この人は1番話しやすい。

「松原さん、おはよう」

「今日は白鷺さん、来るかな？」

「あ、来てるといいね」

そう話していると、横から曾良がいきなり来ていた。

お前どこから来た。怖いぞお前。

「和真、おはよう！それと…松原さんだっけ？おはよう！」

こいつコミュ力高すぎやろ。

「お、おはよう曾良くん」

「おはよう」

「入学2日目で彼女と登校かい？」

いきなり言い出すな。

俺と松原さんはそんな関係じゃない。

「か、彼女…!?ふえええ…」

ほら。松原さん困って目がくるくるしてるよ。

「そんな事あるわけないだろ。入学2日で彼女が出来るわけない。」

「そ、そっか。まあよろしく!!」

曾良と別れ、再び学校へ向かっていると、後ろから視線を感じた。

(ま、気のせいかな?)

そう思いたい。

(あれは…花音とその隣にいるのは…誰かしら。まさか、花音を強引に…!いや、

花音も楽しそうに隣の人と話してるからそれはないかしら。後で問い詰めましょう)

「ふわああ学校へ行くの疲れたあああ」

「戸ヶ崎くん、そこで疲れちゃダメだよ…」

「だって疲れたやん? もう帰りたいもん。」

「そ、そうなんだ」

帰りたい。と思っていたら黄色の髪 of 少女に話しかけられる。

「ちよつといいかしら?」

「? いいですよ」

「ありがとう。花音、ちよつと話させてもらおうね」

「う、うん! 戸ヶ崎くん、その人が千聖ちゃんだよ」

「えっ そうなの!?!」

「う、うん。」

「ありがとう! それで、白鷺さん。どうしたんですか?」

「ええ。ちよつと来てくれるかしら。」

「あつハイ」

俺は白鷺さんに屋上へと連れていかれた(強制連行)

「あなた花音とはどういう関係なのかしら?」



松原さんとの関係？

んー… 関係か、わからん。

「えつと… 関係はよくわかりません。」

「わからない？ じゃあ何故あなたは花音と朝学校へ一緒に登校してるのかしら？」

（。ム）ゲッ！見られてたのか。

「い、いやあれは登校中に偶然会っただけです。」

「ふーん。まあいいわ。花音と一緒に登校する人ができてよかつたわ。」

なんだこの人。謎の威圧感放ってるんだが。

怖いよ。

「だけどあなた。」

ん？ なんだ怖いぞ。

「花音を泣かせたりいじめたりしたら許さないわよ。」

「!!は、はい！」

やっぱりこの人謎の威圧感放ってるって。ラスボス感あるよ。

「じゃあこれからもよろしくね。私は白鷺千聖。」

「あ、俺は戸ヶ崎和真。よろしくです。」

「同級生なんだから敬語じゃなくていいわよ。よろしくね。和真？」

「う、うん！よろしく！白鷺さん！」

こうして白鷺さんと俺は仲良くなった(?)

「戸ヶ崎くん、千聖ちゃんと何話してたの??」

「あー。まあ色々だね。」

「色々って何?もしかして私に秘密にしなきゃいけないことなの?」

松原さん…怖い。

なにかあったんだ。

「あら。和真。花音と仲良くやってるわね。」

「千聖ちゃん…戸ヶ崎くんとナニハナシテタノ?」

「和真。言ってなかったの?私は…」

「もうチャイムなるから早く席に座りなさい。」

担任が参戦してきた。

「じゃあまた後だね。」

---

4時間も終わり、お昼の時間だ。

白鷺さんと松原さんを誘ってご飯食べよー

「松原さん、白鷺さん、ご飯一緒に食べない?」

「わ、私はいいよー！」

「花音が行くなら。」

お昼を食べながら話していると、白鷺さんがいきなりこんなことを言い出した。

「私はあなたのことを和真、と呼んでいるのにあなたが白鷺さん、はおかしいんじゃないか

しゅわん」

おかしくないよ。普通だよ。

入学2日で女子を呼び捨てなんて。

「じゃ、じゃあ私も戸ヶ崎くんの事、和真くんって呼んでもいいかな……？」

上目遣い。これはずるい。可愛い。

うわ。なんか寒気するんだけどすぐ目の前から。

「うん。いいよ。じゃあ……チャイム鳴るからまた後で！」

逃げよう。こういう時は。

「チョットマチナサイ？」

……無理でした。

わかった呼ばないといけませんね。

「千聖、花音、これでいいか？」

「うん……！いいよ／＼／／」

「それでいいわよ。」

あーもう変な事噂されなければいいけど。

けど名前で呼ばないとあの二人なんか怖いからなー。

気づくといつの間にか授業が終わって帰りだった。

「ね、ねえ和真くん」

「どうした？」

「あ、今度の週末、予定あるかな？無かったら新しく出来たショッピングモールに行きたいんだけど……」

「多分なかった気がするよ！行けるよー」

「ありがとう！これ、私の電話番号！連絡先交換しよう？」

え？女子と連絡先交換？そんな事初めてだよ。

「い、嫌だったかな？嫌ならいいんだけど……」

「いや、交換しよう！」

「あ、ありがとう！」

「じゃあ、また明日ー」

「う、うん。また明日ね。」

こうして俺は学校から家へと向かっていた。

## 花の少女とデート。

今日は日曜日。花音と出かける日だ。

あの後メールが来て、集合時間は11:00になった。

「和真、着替えてどこか行くの？週末なのに珍しいわね。」

「うん。松原花音さんと行く約束したからね」

そう言うとう母さんが

「松原花音さん？もしかして、あの松原さん？」

……どの松原さんだよ。知らないよ。

「松原さん？高校に入って初めて聞いたけど……」

「あら、覚えてないのね。松原さんは、あなたの幼馴染よ。」

……はい？見覚えありませんが。母さんからの衝撃発言により俺は固まっていた。

「あと、白鷺千聖ちゃんって知ってるかしら？」

「うん。同じクラスだよ。」

「その子も幼馴染よ。よく遊んだり一緒にお風呂入ったりしてたわね」

は!?お風呂!?そんな覚え1ミリも無いんですが。女の子と混浴?

やべえよやべえよ。

「もう一度会えたこと、運命かもね！大事にしなさいよ！」

母さんはこういう時いじりが強い。少しイラってくる。

そうしているともう時間だ。俺は身支度を済ませ、

「じゃあ、行ってくる。」

集合場所へと向かった。

俺は駅に着き、花音を待っていた。

時刻は11:00。まだ花音は来ていない。

どうしたんだろう。と思い、心配していると携帯が鳴った。

「もしもし...？和真くん？」

「うん。どうかしたの？」

「その... 恥ずかしいけど... 迷子になっちゃって...」

迷子!? どうやって学校まで来てるんだ。この人。

「わ、わかった。とりあえず今いる場所わかる？」

とりあえず冷静に花音の場所を聞く。

「えっと... コンビニが2つあるね」

「どのコンビニかわかる？」

「う、うん。ローオンとセオンだね」

あーわかった。うん。

「今から向かうから待ってて。」

「わ、わかった!」

俺は花音のいる場所へと向かう。

ついた。そこには見覚えのある水色の髪をした女の子がいた。

「かのーん」

「ふええ!? あ、和真くん!」

そう言うといきなり俺に花音が抱きついてきた。

え。やばい。当たってる。それにしても、なぜこんな所で迷ったのか。

「ふええ… 和真くん… よかったあ…」

今の状態は花音が道の真ん中で俺に泣きながら抱きついていてる。

これ見られたらやばいって。

「そろそろ、行こうか? ショッピングモール。」

「あ、うん… そうだね! 行こう!」

花音は少し寂しそうな顔をしていた。何故だ?

「花音は、どこに行きたいんだ?」

「えっと… このシヨツピングモールの中にあるカフェなんだけど…」

「おっけー。よし。走ろう！」

「ふえ!?!は、走る!?!そ、そんな事急につて…ふえええええ!!」

「ちゃんと着いてきてね!!」

花音は俺に付いてきながらもふええええええとしか言わない。しかも涙目だ。あれ。泣かせたらだめだ。あの人に殺される。

「か、花音。大丈夫か？」

「ふええ…な、なんとかか…」

「よ、よかつたあ。あ、着いたみたい。」

「人が多いよお…」

「ま、新しくOPENしたばかりらしいし?仕方ないねー」

俺達は目的のカフェにと向かった。

やつぱりここも女子が多い。いや。男子は俺以外いないぞ。なんか視線感じるし。

「周りの人、みんな女の人だね。」

「いやーなんか視線が怖いね。」

「そつか。じゃあなにか頼もう?」

「うん、そうだね。お腹も空いたし」



「私はこのパンケーキと紅茶で。」

「じゃあ俺はこのミートソースパスタとコーヒーで。」

俺達は注文を済ませ、注文の品を待っている。

地味に気まずい。

「あ、あの和真くん」

「どしたー？」

「入学初日から思ってたけど私たちが会ったことあるよね……？勘違いだったららごめんね  
！」

朝母さんに言われた事だ。

「う、うん。俺の母さんが幼馴染だつて。言つてた。」

「やつぱりそうだよね……！かずくん！」

どこか懐かしい。呼び方だった。

「昔は俺は花音の事をなんて呼んでた？」

「えつと……確かのものって呼んでたと思うよ。」

「俺はのんって呼んだ方がいいのか？」

「そう呼んでくれたら、嬉しいかも……？」

「わかった。のん。」

「所で、俺と千聖も幼馴染らしいんだが、それは知ってる？」

「……」

のんが急に黙り始める。

「のん？」

「……どうして？」

「？」

「どうして千聖ちゃんの名前がデテクルノ？」

「のん？落ち着いて？」

「ワタシハイツデモオチツイテルヨ？」

なんだその文。全部片言じゃないか。落ち着いてないよこの人。

「千聖の名前出したのはごめんって。落ち着いて？のん」

そう言うとのんは正気に戻った。

「わ、私もごめんね。いきなりこんなこと言い出して。」

「けど、私と二人の時は他の女の子の名前を出すのはやめて？」

「な、なんで」

「ワカッタ？」

「は、はい。」

恐怖です。怖い怖い。

そうしていると頼んだ物が運ばれてきた。

俺はお腹がすいていたのですぐに食べ終わり、のんが食べている様子を見てみると、  
「かずくん。パンケーキ食べたいの？」

あ、心読まれた。

「ま、まあ。けどのんが美味しそうに食べてるなーって」

「はい、あーん」

あ、あーん？生まれて初めてだわ。こんな事。

「いや、普通に食べるよ。」

「だめ。あーん」

これももうだめだ。降参しよう。

「あ、あーん。」

う、うん。OC。

「ふふっ 私とかずくん、間接キスしちやったね／＼」

あ、気にしてなかった。ま、いいかー

2人とも食べ終わり、会計を済ませ、この後は色々な場所を回った。

帰り道が分からなくなるだろうと思ひ、のんに送ろうと言おうとすると、

「私の家泊まってかない?」

と言われた。えっ。それはさすがにやめよう。

女の子の家に泊まるなんて。

「いや、遠慮してお「来て欲しいな…」」

なんだその上目遣い。可愛いから断れないじゃん。

「行くよ。」

「やった〜♪」

のんはその場でびよんぴよん跳ねている。可愛い。小動物かな?

それにしても女の子の家に泊まるなんて。初めてだ。

「ふふっ。 かずくん。今日は楽しみだね…! 千聖ちゃんに何かされる前にしておか

ないとね?」

「なんか言ったー?」

「いや、なんでもないよ!」

「そう。ならいいんだけど」

なんか怖いよね。背中から寒気がする。

本当に危なくなったら逃げよう。

# 少女は暴走する。

俺は今、のんの家にいる。

やばいな。なぜか緊張する。

「どうしたの？ここに座っていいよ」

のんは部屋にあるソファに腰を掛けている。

「う、うん。じゃあ遠慮なく。」

俺はソファに座った。

「……………」

気まずい。今とてつもなく気まずい。

「わ、私ご飯作ってくるね！」

「う、うん。」

のんがご飯を作りに行った。

スマホでも見るか。

その時花音は

「ふふ♪ これで私の血がかずくんの中に入るね♪千聖ちゃんに取られる前にね？」

花音は自分の指を切り切り口からでた血を料理に入れていった。

花音が謎の笑みをしていたが気にしないでおこう。

俺がスマホをしていると、メールが来ていた。

(誰からだ?)

千聖からだ。内容はー?

今度私とも出かけて欲しいわ。

花音とは出かけたんだから私もいいでしょう?

断ったらどうなるか知らないわよ。

……ひゃー怖い。

ん?なんかまだ書いてあるな

P. S. 私の友達の彩ちゃんにあなたの連絡先をあげてもいいかしら?

……誰。まあ、怪しい人ではなさそうだからいつか。

俺は千聖にどっちもOKだ。と返信し携帯を閉じた。

閉じた。閉じたのはいいんだ。閉じて後ろを見たらのんがいた。

「誰とメールしてたの?」

「い、いや、ちよつと友達とー..」

「友達って誰? 私には嘘が見えてるよ?嘘つくかずくんにはおしおきかな?」

「お、落ち着いてのん。俺が会話してたのは千聖だ。」

「チサトチャン？イマハワタシトフタリナノニ？」

「ごめん！本当にごめん！もうしないから!!」

「本当に？じゃあ会話の文を見せて。」

俺はのんに千聖との会話を見せた。（強制に。）

「へえ……今回は許すけど次はないよ？かずくん？」

怖いね。怖いよ。もう怖すぎて語彙力ないよ。

「わ、わかった。」

「じゃあご飯にしようか♪」

「う、うん。」

いつも通りののんだ。これだったら可愛いものにな。なんで怖くなるんだろ

そう思っていると料理がどんどん並べられてきた。

「おーうまそう！」

「あ、ありがとう／＼全部の料理に隠し味入れておいたんだ♪」

「へー！じゃあいただきます!!」

「うん！たくさん食べてね。」

---

ふう。食べ終わったー

美味しかったけどなんか変な味するのもあったな。

それにしても、なんかとっても眠くなってきた。

「かずくん、大丈夫?？」

「あ、ああ。多分大丈夫だ。やっぱ俺もう帰るよ… 迷惑かけたくないし。」

「だめだよ。ここで眠ってて。」

俺は床に倒れ込んでしまった。

「おはようかずくん♪」

「のん?どしたの?俺の上にといたりして。」

のんは今俺の上に乗っている。

「それはね… かずくんが千聖ちゃんに取られないようにするためだよ」

え?理解できません。

「千聖ちゃん… いや、かずくんはたくさん女の子から好かれる。だからみんなに取られる前に私のものにするの。」

のんさん性格変わってませんか?二重人格?

「あ、今日の料理全部に私の血が全部入ってるんだ… ♪」



え、だから変な味がしたのか。

そういうとのんはいきなり俺の唇に唇を重ねてきた。

「んっ… んっ… んんん」

声が。声をもう少しね!?

ていうか俺の初キス。好きじゃない人とするなんて。

「や、やめて」

「なんで？私はずくんの事がこんなに好きなのに。」

「そ、それは…」

ガチャ。

何かが開く音がした。

「お母さんだ… なんでこんな時に…」

よし。チャンスだ。

今のうちに帰ろう。

俺はのんが戸惑っているうちに逃げた。

よし。成功。

「ふええ… はずくん… どこいったのおく…」

俺はのんの家から逃げ出した。

……なにあれ。あれは松原花音じゃないよ。ただのやばいぐらいに男を好いてる人だよ。可愛いのにそのせいで恐怖だよ。あの時ののんは千聖のあの威圧感より怖い。うん。

---

俺は家に帰り、すぐ風呂に入りベッドに入った。

(のんに初キスをされちゃった…。なんか悲しいような嬉しいような。)  
俺はすぐに眠った。

花音 side

かずくんは逃げたの？

やつぱり千聖ちゃんとかに汚されちゃったんだよね。

大丈夫だよ！私が元に戻してあげるからね…

大好きだよ。かずくん♡

## 同じ過ちはしないようにする。

俺はこの間の花音の件で花音が怖くなってしまった。

「のん」と呼んでいたが怖くなったので花音と元通りに呼ぶ事にした。

「……今日は千聖と出かける日か……」

俺はあの時の花音で少しトラウマになってしまった。

千聖もやってくるのではないか。そう思い、断ろうとも考えたが、

誘われたし行こうと決意した。

けど、泊まりなどに誘われたら絶対断ろう。

「時間は13:00からか……」

現在時刻は12:00。準備したら丁度いいだろう。

(花音にあつたら謝ろう。けどあの花音が怖い。)

「よし、行つてきます。」

俺は家に言い伝え、家を出た。

少し早かったかな……?

まだ集合時間より10分程早い。

「あら？・もういたのね。」

千聖だ。

「うん。まあ丁度来たところだけど。」

それより千聖の隣にはピンクの色の髪をした少女がいる。

「千聖の横にいる少女は何者？」

「あ、紹介してなかったわね。こちらは同じ学年の彩ちゃん。この間メールで連絡先を上げてもいいかって聞いたのはこの子よ」

「よ、よろしくお願ひしましゅ… あ！・また噛んだ〜!!」

「よ、よろしく。」

噛んだ。可愛い。

うわ、また寒気した。極寒の地より寒いわ

そうだったのか。

まあどちらにせよ2人でも3人でも関係ない。

「じゃあ行くか。」

「ええ。そうね」

「う、うん!!」

こうして俺達はショッピングモールへと向かった。

「うわあ…でっけえ。」

花音と来た時も見たが何回見てもでかい。

「そ、そうね。」

「これはSNSにあげなきゃ…」

丸山さんが必死に写真を撮っている。

「彩ちゃん？もう行きましょ 和真もね」

「わ、わわわ！待ってよ千聖ちゃん!!」

「……………」

千聖は黙って丸山さんを引っ張っている。

「ちよ、千聖…さすがに丸山さんの事を離してあげないと可哀想だよ…」

「あら？和真は彩ちゃんの味方をするのね？いいわ。あなたも一緒に引っ張ってあげる

わ」(´ω´)(ニコニコ

「ちよっ やめろってー！」

……………はあ。もう疲れた。俺と丸山さんは千聖に引っ張られ強引にショッピング

モールの中へと連れられた。

「そ、それで、どこに行くんだ？」

「ええ。私はアクセサリーショップに行きたいわ。ここにしかない限定品があるの。」

「丸山さんは？」

「あ！えつと私は……服とか見に行きたいな!!」

服とか。ねえ。時間めっちゃかかりそう（小並感）

「じゃあどつちから先に行くんだ？」

「私はどつちでもいいよ！」

「じゃあ私の方から行きましょ。」

「おっけー」

「わー。ここも女子ばかり。」

花音と行ったカフェと同じように男がほぼ居ない。

「そうね。じゃあ入りましょ。」

いや、そこはあなたは待ってていいわよ。とか言うでしょ!?

「そんなこと言うわけないでしょう？」

心読んでるく読まれたく

（結構綺麗な飾りとかあるもんなんだな。）

そう思っていたら千聖がいきなり言ってきた。

「あ、そうね。ここに来た記念で3人でお揃いのアクセサリーを買わないかしら？」

「わ、私はいいと思うよ!!」

「別に気にしないからおけ」

「こんな簡単に了承していいのか。これ花音にバレたらヤバいけどバレなければいいか。」

「これ可愛い〜」パシャパシャ

「ちよ、丸山さん。可愛いって言いながら写真撮るのやめませんか？」

「だつて可愛いんだもん〜！」

「まあ。そうだな。これを丸山さんが付けたらもつと可愛いと思うよ」

「かつ！可愛い!？」

「あら？和真？もしかして彩ちゃんのこと狙ってるのかしら？」

怖くね。下手な恐怖映像より怖いね。うんうん。

「え？ただ似合つてると思ってたから言ったんだけど…。」

「まあいいわ。ところでお揃いのアクセサリーはこれでいいかしら？」

千聖は黄色、ピンク、水色の3つの同じアクセサリーを手にしている。

「いいと思う。」

「かつ…かわいい／＼／＼」

丸山さん…まだ言ってるよ。

「彩ちゃん？（ω、ω）ニコニコ」

わーえがおきれいだなあ

「うーん！いいと思う!!」

「そう。じゃあ買ってくるわね。」

「おけい」

（あれ。そう言えば今日は（4 / 6）千聖の誕生日だったっけな。なんか似合いそうなの  
買っていくか。）

俺は素晴らしい星型のアクセサリーを買った。

「あら？和真はどこかしら？」

「か、和真くんならなんか買いいに行ったよ！」

「そう。なにか買ったのかしら？」

「おまたせえ」

「何を買ったのかしら？」

「え？ああこれね！はい！誕生日プレゼント!!」

「覚えててくれたのね。ありがとう。開けていいかしら？」

「よし。」

「和真にしては可愛いのを選ぶわね。」

「にしてはってなんじゃ!？」



「ふふっ。冗談よ。ありがとう」

「そろそろ行こうよ」

丸山さんが退屈そうに顔を膨らませていた。リスみたい。かわいい」

「いたっ!?!」

千聖さんが足を無言で踏んでくる。痛いって。

「( ^ ω ^ ) ニコニコ ( ^ ω ^ ) ニコニコ」

「満面の笑みですね千聖様」

「そうね。行きましょうか。」

「服だ〜!」

「いてててて… (ボソツ)」

「和真くん。大丈夫?」

「だ、大丈夫だ。丸山さん、ありがとう。」

「あ、あの… 今度2人で出かけて欲しいな… とか。」

「わかった。この事は千聖には秘密な。」

「何が秘密なのかしら?」

あーもう無理ですねえ!

後で千聖に問い詰められたのは別の話。

「服屋さん♪私、服見てくるね!!!」

丸山さんが張り切って服を選んでいる。

「和真くん!!ちよつと来て欲しいんだけど〜!」

「はあ。わ、わかった。千聖、行ってくるわ。」

「ええ。けど、わいせつ行為はしないようにね。」

「そんな事するか!!!」

「ふふっ。」

「丸山さん、どした。」

「あの、服を選んで欲しいんだ!どっちが私に似合ってるかな?」

……正直どっちも似合ってる可愛い。

「丸山さんなら何を着ても似合うと思うよ。」

「え〜!そんなあ〜!まあ和真くんに言われたからどっちも買ってくる!!」

「おう、そうだね」

「お待たせー!」

「じゃあ行きましようか。もう遅いし帰りましよう。」

「「おう(うん!)」」

---

「今日は楽しかったわ。ありがとう。また出かけてくれるかしら？」

「ああ。わかった。俺も楽しかった。」

「和真くん！ちよつと残つて欲しいんだけど……！」

「ああ。おけつ！じゃ、じゃあな！千聖く誕生日おめでとう！」

「ええ。ありがとう。またね。二人とも。」

「ねえ和真くん。花音ちゃんの事どう思う？」

えっ？花音？いきなりだな。

「花音は友達つて思つてるよ。俺は」

「へー。じゃあ千聖ちゃんは？」

なんだこのふわふわピンク。

「千聖も同じだよ。」

「じゃ、じゃあ私は？」

「丸山さんも同じ。」

この時の丸山さんは少しがっかりした顔をしていた。なんでだろ。  
「わかった！じゃあまた今度ね！！ばいばい！和真くん！！」

いきなりだな（笑）

「おう！またね！」

こうして俺達は何も問題なく(??) お出かけは終わった。

## 復縁・・・？

今日は月曜日。

普通に学校ですねえ。少し行きたくないです。

ん？何故行きたくないって？花音が怖いからだ。

あれから少なくとも30回は通話がかかってきている。

花音似合ったらなんて言われるのか・・・

「ちよつ、母さん、ちよつといいかなー？」

「なに？」

「今日の学校、行きたくn「絶対だめよ」ですよねー。」

もう行くしかないのか。

「よし！仲直りするぜ!!」

俺は覚悟を決め、学校に行った。

---

朝は校門に風紀委員がいる。

俺はよく登校中に水色の髪の色風紀委員を見る。

いかにも、この委員にぴったりだ。

俺が挨拶をされて返さないと怒られる。それぐらいいいだろ。

「おはようございます」

今日は俺から挨拶をした。

「おはようございます。今日はお早いですね。」

「はい、まあ... 色々。」

「大変ですね。頑張ってください。戸ヶ崎さん。」

「は、はい。」

てかなんでこの人俺の名前知ってるんだ？

俺教えてないよ？

?? (また私以外の女と喋ってる... 私的事、嫌いになっちゃったかな?)

視線を感じたのは気の所為だろ。

俺は教室へ行った。

「誰も... いないよな。」

やっぱり早かったのか教室には誰もいなかった。

「やべ!!まだ今日までの課題終わらせてねえじゃんWWW」

早く来てよかった。初めて感謝したわ

「かず…くん？」

あつ。この声は…花音だ。

俺が恐る恐る後ろを向くと見慣れた人がいた。

「かずくん、この間はごめんね。」

「あ、ああ…こつちも何も言わずに逃げ出してすまんかった」

「う、うん。大丈夫だよ。じゃあここでキスしよう？」

キス？唐突だねー。まあ初キスはこの人なんですけどね。（強制にされた。望まないキス。）嫌です。

「嫌だ。」

「なんで？わたしはかずくんが大好きだよ。この前も千聖ちゃんと彩ちゃんと出かけてたでしょ？」

なんで知ってるんだい？そう聞きたいがやめておこう。

「まあ出かけてたが。それがどうかしたか？」

俺は花音に尋ねる。

「なんであの二人とは仲良くしてるのに私とは仲良くしてくれないの？」

「それは花音が怖いからだ。」

「なんで？なんで私が怖いのか？それに、なんで「のん」って呼んでくれたのに今は呼ん

でくれないの？ やっぱり千聖ちゃんと彩ちゃんの方が好きなんだね。あんなに仲良くして。こんなにかずくんが大好きなのに。どうして？ どうして？ どうして？ どうして？

「花音、落ち着いて。俺は花音、千聖、丸山さんは3人とも同じ関係だ。同じ関係でいたい。花音が俺を好きなのはありがたい。ただ、今の花音は怖い。怖いから俺は避ける。」

そう言うのと花音は泣き出してしまった。

「そう… だったんだね。ごめんね… 私がこんな事をしたから…」グスツ

「分かってくれたか？ 俺は今の花音は好きになれない。」

「うん… けど、一つだけお願い… 私と… き、キスをして欲しいな…」

「ま、まあそれで花音が戻るって言うなら。」

「やったあ…！」

俺達は唇と唇を近づける。

「んっ／＼うう／＼」

やっぱり声がなんかねえ。はい。

「何をしているのかしらっ？」

あつ。これはやばいね。



俺人生終わりだわ。

ていうか花音が千聖来てるのにキスをやめようとしませんが。

「か、花音！千聖いるから!!」

「えっ・!?!千聖ちゃん・いつからいたの?」

「あなた達が好き、キスをしていた時よ。」

……最悪だ。まだ千聖でよかったが。十分最悪だ。

(また千聖ちゃんに邪魔されちゃった……かずくんは逃がさないからね……♪何をしてでも好きにさせてあげるからね……!)

「ま、まあとりあえず事情を話して頂戴。」

「わ、わかった。」

## 依存

今、千聖から事情聴取をされている。

めんどくせえ。こんな事あるんだったら早く学校来るんじゃないか。終わってない課題全然出来てないし。

「和真？聞いてるのかしら？」

「きいてるよー」

聞いてないんですけどね。

「嘘はダメよ。あなた本当は聞いてないでしょう？」

バレてました、もう千聖さんには何も隠せませんね

「はい、聞いてません」

「じゃあ罰として放課後私と出かけなさい」

「あーいやで「いいかしら??」……はい。」

というか花音の目から光というものが消えているんだが。

目が笑ってないよ！

「大丈夫だよ。ちゃんと笑ってるから……」

怖いわ。目から光を無くすなよ！

「とりあえずもういいか？俺課題終わってないから」

「わかったわ（うん）」

こうして俺の災難な朝は終了した。

---

「ふあゝ!!眠い！疲れた！帰ろう!!」

俺はいざ帰ろうとした瞬間

「ちよつと待ちなさい？あなた、私との約束、覚えてないのかしら？」

忘れてた。なんでだよ。もう帰れると思っただろ!!

よし、ここは帰っていいか聞こう！

「千聖様、帰ってよろしいでしょうか？」

「だめよ。それとも、私と出かけるのが嫌だったかしら…？」

千聖さんの上目遣い。可愛いんだが!!!!ていうか美しい!!

「わかったわかった。行くから。」

「やったわね♪」

いつもこんな感じだったら可愛いものになあ…

待って。今寒気したんだが。それも真横から。

「いい笑顔ですね！」

「そう？ありがとうございます」

「じゃあ行きましょう」

「うい」

「ひとつ聞いていいかしら？」

「なに？」

「あなたは花音と彩ちゃんのことはどう思ってるの？」

「花音と丸山さん？普通に友達って思ってるよ。もちろん千聖もな」

「ていうかこの質問前に丸山さんにされたよな。」

「そ、そう。」

「やっぱり少し寂しそうな顔してるなかなぜ???

「着いたわよ」

「えっここ!?!」

「俺達が今いるのは前に花音ときたカフェだ。」

「知ってるの？」

「う、うん。まあ…」

「ふーん。じゃあ、入りましょ」

「そうだな」

「ここに来る男女ペアは影でカップルって呼ばれてるらしいわよ。」

「そうなのかよ。けど俺と千聖は違うだろ。」

「つれないわね。この鈍感。」

「ん？なんか言った？」

「いいえ？なんでも？」

なんかあるだろ絶対。

「とりあえずなんか頼むか。俺はこのコーヒーとオムライスで。」

「じゃあ私はミルクティーとパンケーキにするわ。」

俺達は注文を済ませた。

「ねえ、和真。」

「なに？」

「今日あなたの家に泊まりに行ってもいいかしら…？」

えー… 女子を家に入れるなんて俺はできんよ!!!

けど断るのも可哀想だし… とりあえず親に許可とるか。

「ちよつと待つててくれ」

俺は千聖に言い残し、家に電話する。

「ただいま留守にしております。もう一度おかけ直してください」

「あつ、今日親いないんだつた…」

「ま、まあLINEで母さんに聞くか!!!!」

(LINE)

和真

「今日友達を家に泊めていい？」

ん

母さ

「いいわよ。」

返答早すぎ…

まあいつか

「お待たせ千聖、泊まってるいいよ。」

「そう。じゃあ泊まらせてもらうわね」

「ご注文の品です！ごゆっくりどうぞ！」

「ありがとうございます」

やつはこのカフェのコーヒーはうめえ。まだ2回しか来てないけど。

本当だよ!?

「和真、はい、あーん」

「な、なんじゃ千聖」

「あーん」

「あ、あーん」パクッ

「う、美味しいね。」

「そうね」

この後たくさんあーんして食べさせられた。

「じゃあ行くか」

俺達は会計を済ませ、俺の家へと向かう。

ていうか簡単にやってるけど女の子を自分の家に入れるって普通にやばいことしてない? 世間は許してくれませんかね。

「お邪魔します。」

千聖は礼儀はいいよな。ひえつ。また寒気きた

「まあ、寛いでいいよ」

「ありがとう」

「俺、先に風呂入ってくるわ」

「そう、行つてらっしゃい」

「和真はいないわね…」

千聖は静かに和真の携帯を開く。

パスワードはもう認知済みだ。

「こんな他に他の女と連絡先を交換してるのね… 和真にはお説教が必要かしら？」  
そうして和真の携帯に入っている女の連絡先を全て消した。

「私以外の女と会話するなんて…」

「千聖ー、風呂開いたぞー」

「ええ。入らせてもらうわ」

「いえ」

「あれ？俺の千聖以外の連絡先が消えてる… 何故だ？」

「上がったわよ、どうかしたの？」



「いや、千聖以外の連絡先が消えててさ。」

「そうなの。ご愁傷さま。」

「いや、まあいいんだけどさ」

「そう。ところで和真、クッキー作ってきたんだけども、食べてくれないかしら？」

「おつ美味そう！貰っていいのか？いたいただきます！」

美味い。けど眠くなってきたわ。疲れかな？

「あら、もう効果が出たのね」

「ち…さ…と…」

「ふふっ♪おやすみなさい」

---

起きたら俺はベッドの上で縛られていた。

「千聖さん！離してください！なんでもしますから！」

「なんでもする？じゃあ私と結婚して欲しいわ」

「結婚？そんなのよゆ…え？結婚、？」

「冗談よ」

「おう、よかった。けど千聖、何故今俺は縛られているんだ？」

「それは、あなたを私のものにするためよ」

「は???!」

そう言うと、千聖はカバンから謎の注射器?を取り出した。

「これを打てば和真が私の事しか考えられなくなるわ」

「やめてよ、何でこんなことするの」

「あなたが大好きだからよ」

そして、千聖は俺にその針を刺してきた。

「うっ… うああ!!」

痛い。痛い。痛みと同時に、眠気も襲ってくる。

「起きたら私しか考えられなくなるのよ♪」

---

「起きたかしら?」

「千聖?千聖なの?」

「そうよ。あなたの愛する私よ」

「千聖… 大好き… もう離れないで… 千聖がいないと生きていけない…」

「そうね、私も大好きよ。いや、愛してるわ」

「うん… !千聖以外の女はみんな嫌い… 千聖が居れば俺はいい… 千聖、愛してる」

こうして和真は千聖のことしか考えられなくなってしまった。

「まあ、元に戻す薬もあるのよね。」

## みんなで

「千聖……好きだよ……愛してる……もう離れないで……」

「ふふっ♪私もよ。もう離さないわ」

花音や彩ちゃんにはもう触れさせない。

和真は、私のモノだから。さすがの2人も、この様子を見たら自然に離れていくでしょう。

「とりあえず登校しましょ」

「うん……絶対離れないでね……」

「わかったわよ。和真は可愛いわね♪」

「千聖ちゃん？なんでかずくんが千聖ちゃんにずっとくっついて離れようとしなないの？」

「和真は私無しじゃ生きられなくなったのよ。それだけよ」

「ダメだよ千聖ちゃん!!」

彩ちゃんが大声を出す。

「あら？彩ちゃん、花音。和真は私の事以外どうでもいいのよ？」

「そういうことよ。じゃあね」

「ふええ〜。かずくんがあ〜。」

「花音ちゃん、泣いても仕方ないよ！今は戻す方法を考えなきゃ」

「そうだね。彩ちゃん。ありがとう」

---

「千聖〜可愛いね〜大好き〜！」チュツ

「和真、いきなり大胆ね。お返ししてあげるわね」チュツ

「えへへえ〜！」

「和真くんが崩壊してる。千聖ちゃん、何をしたんだろう。〜。」

「なんか薬を入れたとか？」

「ありえる。千聖ちゃんならやりかねないね」

「よし、後で千聖ちゃんのパックの中を見て元に戻す薬がないか探してみよう！」

「う、うん！そうだね！」

---

「よし、今のうちに行こう！花音ちゃん！」

「うん！」

ガサガサ：

彩「あ、あつたあ!!!」

花音「ほ、ほんと!？」

彩「うん!ほら!」

確かに手には注射器がある。

これが恐らく戻すための薬かな？

「あとはこれをかずくんに入れるだけだね。」

「そうだね。けど和真くんは千聖ちゃんに付きつきりだよ？」

「どうしよう…?」

「不意打ちで打つ?」

「けど、千聖ちゃんが…」

「千聖ちゃんをどうにかするしかないね…」

「じゃ、じゃあ私が千聖ちゃんを引き付けておくから花音ちゃんはそのうちに和真くんにその注射器をさして!!」

「大丈夫かな…?とりあえずやってみるね!」

こうして2人の作戦ができた。

「千聖ちゃんっくん!!」

「なにかしら?」

「ちよつと二人で話したいんだけど、いいかな?」

「和真、いいかしら?」

「すぐに戻ってきてくれるなら...」

「わかったわ。すぐ戻ってくるわ。彩ちゃん、行きましょ。」

「うん!!」

私は花音ちゃんにメッセージでOKと伝える。

お願い。和真くん。元に戻って。

「彩ちゃん?何か用?」

「あ、今度、私と花音ちゃんと千聖ちゃんと和真くんで行かない?」

「... 和真がいいなら私はいいわよ」

「ありがとう!それだけ!」

---

花音 side

彩ちゃんが無事に誘導することが出来たみたい。

あとはかずくんこれに刺すだけ。

よし！行こう！

「ねえねえ。ちよつといいかな？」

「千聖!?!」

ブスツ

「うっ… 痛い！なにをするの…」

「かずくん、元に戻ってね！」

「な…に…」

千聖 side

せつかく和真を自分のモノにしたのに。

なんで彩ちゃんと花音は邪魔するの？

「花音、なにしてるのかしら？」

「なにつて、千聖ちゃんがかずくんに自分の事を思わせてるからだよ。だから元に戻す注射器を貰っておいたよ。」



「…ないですよ。ふぎけないですよ！ふぎけないですよ！！」

「なんで私が和真に思われちゃダメなの？あなた達がいるからじゃない！！和真の周りにはたくさん女の子がいるのはわかっている！！けど私は和真のことが大好きなの！！花音！あなたにこの気持ち、わかるわよね！？あなたも同じでしょう！？花音だけじゃなく、彩ちゃんも、他の女の子だって！！それでも…私は和真の事が好きなのよ…。」

花音

初めてだ。千聖ちゃんがこんなに大きな声で怒ったのは。

私にも千聖ちゃんの気持ち、よくわかってる。

彩

怖い。今千聖ちゃんはとても怖い。

けど、私も和真くんが好き。

だけど、この気持ちはまだ表せない。

「ん？3人ともなにやってるんだ？」

「か…ずま？」

「かずくん？」

「和真くん…。」

「3人ともどしたんだ？喧嘩してるの？」

「いえ… なんでもないわ」

「なんもないよ。」

「な、なんもないよ!!」

「そうか、3人とも可愛いんだから喧嘩するなよ」

「「かっ!!かわい!!?!?!」」

「うん。可愛いよ」

「もう、和真つたら。ごめんなさいね。」

「そういうと静かに頭を撫でてくる。」

「いい匂い。」

「あつ!千聖ちゃんだけずるい!!私もやる!」

「( \* ?? ? \* )?」ナデナデ

目の前に千聖、そして横に丸山さんだ。匂いがいい匂い。

「わ、私もやりたい」

ナデナデ(。・ω・)ノ

「ちよつ: / / そんなに3人からやられるときすがに恥ずかしいって。」

「そう?私のもつと恥ずかしがって欲しいわね」ナデナデナデナデ

「そうだよ!もつと撫でてあげる!!」ナデナデナデナデ

「私も恥ずかしいけど… もっと撫でるね」 ナデナデナデナデ

「えへへえ／＼」

「可愛すぎる。なんか元に戻ってから可愛くなった？」

「なんもないよ？」

「勘違いだね」

「花音、彩ちゃん、いいかしら。」

「どうしたの？」

「私たち3人協力して和真を墮とさないかしら？」

「墮とす？」

「ええ。3人とも好きにさせるってことよ」

「いいね!!」

「決定ね」

その頃遠くで…

??「あの人は何をしてるのかしら…？ 風紀を乱す行為でなければいいですが。あ、

和真さんもいらつしやるわね。」

「和真さん、ちよつといいでしょうか？」

「ん？ どうしたんですか？」

「あ、私は氷川紗夜です。何度かお会いしてますが。」

「そうですね。川口和真です。なんで名前を知ってるかは知りませんが…。」

「まあそこは気にせずに。よろしくお願いします。」

「よろしくお願いします!」

氷川さんと話し終え、あの3人は無視して歩いてある事を思う。

(もうすぐ高校二年生になってしまうんだよな… 早すぎだろこの展開。)

## 優しき

俺が起きたら、丸山さん、花音、千聖の3人が何かを話していた。

その日以来、あの3人は変わった。

「あ、あの！和真くん！これから3人とずっと一緒に暮らさない？」

前まで1人ずつが怖かったの今は3人仲良くなったのか…

「無理です」

「え〜!!ひどい!!」

メッセージアプリのグループにて

彩「和真くんに断られた〜！」

花音「彩ちゃん、大丈夫だよ。かずくんは絶対手に入れるから」

千聖「ええ。そうね。他の女達にとられる前にね？」

彩「そうだね!!」

ちなみにこのグループの名前は（和真を私達だけのものにするグル）

「ねえかずくん……！」

「ん？どうした花音」

「彩ちゃんと私と千聖ちゃんと一緒に一生を過ごさない？」

「え？無理だわ……」

「ど、どうして？」

「理由は無い！じゃあな!!」

「ふええ〜!!待ってよ〜」

「けど千聖ちゃんがなんとかしてくれるよね」

---

あの二人は何があつたんだ… この2人がこうなってるってことは

まさか千聖も…!!千聖は絶対にめんどくさいから見つからないようにしないと.

「何がめんどくさいのかしら？」

「ひえっ?!千聖さん!」

「なにをそんなにびっくりしてるのかしら。さあ、行くわよ」

行く?何処に?

「あの、どこに行くんでしようか」

「私達4人が幸せに過ごす所よ♡」

ハートを付けるな！恐怖だわ!!

「あら、和真さんじゃないですか。それに……隣にいるのは白鷺さんでしょうか？」

「あら、紗夜ちゃんもなのね」ポソツ

「なんか言った？千聖」

「いえ。なんでもないわよ？」

そういうと俺の服を強く掴んでいた千聖の手は離れた。

「白鷺さん、私は和真さんに用があるのでいいでしょうか？」

「まあ……いいわよ」

「わかりました。では行きましょう、和真さん？」

「あ、はい」

今は後ろから千聖の怖い目線を感じられる。

それにしてもあの3人は妙だ。

そう思っていると生徒会室に着いた。

「どうして……」

「少し待っててください。」

何かしたかな？何もしてないけど

「これ、忘れ物です。」

あ、無くした時計。

「あ、ありがとうございます!!」

「今度は無くさないように注意してくださいね」

「はい!」

「ところで、今日私の家に泊まりに来ませんか? 両親が出張でいなく妹の世話が大変なのですが…」

氷川さんつて妹いたんだ〜どんな感じなんだろう

「わかりました。では1度帰ってから向かいますので場所を教えてください」

「どうぞ。」

俺は氷川さんから家の場所の地図を受け取り、家に帰ろうとしたその時なんだけど。

「和真くん!これからちよつと付いてきてくれない?」

「無理です」

「かずくん、私についてきてくれるよね?」

「無理です」

「和真? 私達と仲良く一緒に一生を過ごしてくれるわよね?」

「無理です」



俺は覚悟を決め、3人から猛ダツシユで逃げた。

「つ、疲れたあ〜」

家に着いた頃にはもうクタクタだった。

しかしこれから氷川さんの家に行かなければならない。

「母さん、友達の家泊まるから今日はご飯いらない」

と置き手紙を置いて家を出た。

氷川さんの家に行く時も警戒は必要だ。

前を見ると見慣れたピンクがいたり、家の前にはふええさんがいる。

そして俺の向かう場所には魔女がいた。

この人たちなんでこんなにいるんや？

ストーカーかな？

「ピンポン」

氷川さんの家だ。早めにピンポンを押し家に入りたい。

3人がいる。

( ♪ — ♪ — ) σ ピンポン♪

「はい」

「えつと戸ヶ崎です」

「入っていいですよ」

よし。これでセーフ。

「お邪魔します〜！」

俺がこう言うと

「おねーちゃん！知らない人がいるよ！」

「日菜、落ち着きなさい。この人は私の同級生よ。和真さん、こんばんは」

「こんばんは〜」

「もしかして和真っておねーちゃんの好きな人？」

「違うよー！（違いますー！）」

「あはは〜！二人揃ってる！るんっ♪てきた！よろしくね！和真！」

「よ、よろしく、日菜さん」

「日菜って呼んで！」

「日菜さ「ひな！」日菜。」

「よくできました」ナデナデ

「あの、和真さん、私も紗夜と呼んで欲しいのですが…。」

「わかった。紗夜。」

「:!! / /」

「おねーちゃん顔赤いよ?」

「き、気にしないの!」

「とりあえず入っていいかな?」

俺はまだ靴を履いていた。

「入って!!」

「お邪魔します。」

「私達2人は、夜ご飯を作ってくるので、適当に座っててください。」

「O? K? で? ? ? ? ? す? ? ?」

「ねーおねーちゃん! あたし後で和真と遊びたい!」

「あなただけはだめよ。私も一緒にしたいわ」

「えー。じゃあ今回は3人で今度2人で遊ぼつと」

「日菜! あまり和真さんに迷惑をかけないようにしなさいね?」

「うん!!」

## 「泊まりは理性が持たない」

自分は今氷川家にいる。

なぜか？

それは紗夜に泊まらないかと誘われたからだ。

その前にストーカーの3人がいたがそれは気にしないでおこう。

あの3人はちよつとおかしい。

ところで今俺はなんでこんな状態なのか。

氷川家の妹、日菜が背中に乗っている。

・・・こんな理性が持ちません!!!無理です!!

俺の背中に乗っている日菜は幸せそうな顔で

「えへへえく。和真の背中あつたかいなあく」

こんな耐えられますか？全国の日菜推しの皆さん。

可愛らしい顔してしかも成長したアレが当たっている。

(よし。俺。一旦落ち着け。日菜はかわいいが表に出したらまずい。)

俺は深呼吸をした。

「ちよつと日菜!!私がいけない間に何をしてるんですか!」

「え〜だつておねえちゃんがいなかったからいいかなつて!」

「日菜、いてもいなくてもよくないぞ。俺が。可愛い日菜が見れたのはいいけど」

「えつ／＼かわいい／＼」

「え?なんか言ったか?」

「なんも!!／＼」

日菜が頬を赤くして喋っている。なんもしてないよな?

「和真さん?自分が言ったことわかってますよね?」ゴゴゴゴ

やばい。紗夜からとてつもなく凄いオーラを感じる。

「ご、ごめん!!わかったから無言でこっちに迫つてこないで!!怖いから!!」

「失礼しました。けど、日菜に言った言葉、それは見逃させません。」

「なんかすればいいの?」

「えつと...その...私の頭...なでなで...」

かわいい!!!

この姉妹は俺の理性を壊そうとしてるのかつてくらい可愛いぞ!!

どっかの3人組とは違ってなあ!!

「わかった!!!喜んでやる!!」

そうやって紗夜の頭を優しく撫でた。

・・・撫でてる時の幸せそうな顔。やっぱり姉妹で似てるところはあるんだなって。かわい。

「おねーちゃんだけずーるーい!!!あたしもやって!!!」

「はいはい。」

「えへへ・・・」

「・・・／／／」

いつまでやればいいんだ？これ・・・

もういいだろと思いき手を離すと

「だめー！（だめですー）」

ですよねえー

そうやって俺は日菜と紗夜の頭を撫で続けた。

---

そろそろ寝る時間だ。

時刻は11:30。明日も休みだが健康に気を使って早く寝よう。

「ふわあ・・・和真そろそろ寝よう？」

「そうだね」

「じゃあ右左で私達で真ん中に和真さんですね。」

え？なんて？

「ん？いや俺はリビングで寝るので2人はいつもの場所で……」

「だめ……？」

ひなあああああああ!!

この上目遣いに勝てるものはいないはず!!

「し、仕方ないな。じゃあ寝ようか」

必死に誤魔化す。日菜はとても喜んでいる。紗夜は顔を手で隠している。なんかあつたか？

そうして俺達は布団について寝た。

しかし……

……寝るのはいい。寝るのはな。

ちなみに俺の左に日菜、右に紗夜だ。

正直言うともめちゃくちゃ近い。めっちゃいい匂いする。右を向いたら紗夜さんの美しい顔があり。

左を向くと日菜の可愛らしい顔がある。

これは寝れん。

俺は天井の方を向いて目を瞑った。

朝7:00

「んん？なんで布団にいるのお…？」

日菜が寝ぼけている。

ちなみに俺はもう起きています。日菜が起きた瞬間に寝たフリをした。

「んん和真あゝ…」チュツ

えっ！！／／／

日菜がキスを…キスされた…嬉しいけど!!!

「日菜？」

「スピー

寝てるみたいだ。

多分覚えていないだろう。

これもきつと夢だな。もう一度寝るか。

「んっ…朝ですか。」

今は8:30。私は目が覚めた。



昨日はとても楽しかったです。

和真さんが泊まりに来てくれて、日菜とも久しぶりに話せました。ほんとに、和真さんには感謝ですね。

「ありがとうございます」 チュッ

彼の頬にキスをした。

寝ているため気づいていない。

寝顔がとても可愛らしいです♪

さて、私ももう少し寝ましようかね…

「…ろ… 起きろ日菜、紗夜」

もう9：40分だ。

2人を起こし、もう俺は用事があるので帰らなければならない。

早く起こそう。

「和真くおにゃよう〜」

にゃ!?!猫か!!

「和真さん、おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

2人に挨拶を済ませ、帰宅の準備をする。

「和真もう帰っちゃうのー??」

「ごめんな、俺も用事がある」

「また来てくださいね。」

「ああ、また学校でな!」

俺は家を出て、自分の家に帰ろうとする。

このあと、無事に帰れるわけがなかった。

「あの、すみません!ちよつといいですか?」

声をかけられた。

髪色がすごい。ピンクと水色。

ツインテールの女の子だ。

「はい!大丈夫ですよ!」

「ちよつとコンビニまでの道がわからないので案内してくれますか?」

困ってる人っぽいな。

用事はあるが時間には余裕だ。

「わかりました！じゃあ行きましようか。」

「はい！」

このあと何が起きたかはまだ明かされない。

見知らぬ人にも声を掛けられる。2度も。

「どこのコンビニまで行くんですか？」

俺は今凄い髪色の女の子に案内をしている。

「まあ〇〇ら辺のコンビニまでお願いしますーあ、紹介が遅れました。私、れおなと言います。RAISE A SUILENというバンドで、キーボードをやっています！」

RAISE A SUILEN? 聞いたことないな…

今度見に行くか。

相手も紹介してくれたし俺も自己紹介はしよう。

「俺は川口和真。よろしくな」

「知ってましたよ？」

え? 今なんて? 知ってましたよ??? 俺あなたと初対面。

「な、なんで知ってるんですか？」

「私、パスパレのファンでよく交流するんです。そこで、千聖ちゃんとか彩ちゃんが和真さんの事をたくさん聞かせてくれます!! とつても嬉しそうに話すんです!」

やはりあいつらか…

知らない人までに俺のことを喋るなよ。

「そうか：．．あの二人にはやめてくれと言ってくれ：．．」

「?わかりました!」

そう話しているとコンビニまで着いた。

「ありがとうございます!!よければ今度、RASのバンドの練習見に来ませんか?」

「RAS?なんだそれ」

「RAISE A SUILENの略です。ぜひ覚えてくださいね〜!」

なるほど。

今度見に行こうかな。

「じゃあ連絡取れるように連絡先交換する?」

「わかりました〜!練習がある日、誘わせていただきます!!」

「それじゃまた。」

俺はれおなちゃんに別れを告げ、用事があるので向かう。

結構時間がギリギリになってしまった。

そんなことを思っていた矢先だ。

「和真、ちよつといいかしら。」

千聖が目の前からでてきた。

心臓止まりました。

「わっ!!!千聖さん!!!」

俺はびつくりして思わず大声を出した。

「なによ。そんなにビツクリすることじゃないじゃない。」

「そりゃビビるよ。千聖さん。いきなり出てきたら誰でもビビる。」

当たり前だ。

「そうかしら。まあビツクリしてしまったなら謝るわ」

「うん。大丈夫、あ！千聖さん！今日今から用事あるからごめん！失礼します!!」

俺は全速力で駆け抜けた。

「和真がいなくなっただけけれども家の中に潜めておいた盗聴器でも聞くとしましうか  
」  
♪

やべえ。時間が。やべえ。

ん？なんの用事かって？それは墓参りだよ。

今日は姉ちゃんの命日なんだ。

若い頃に亡くなって…おつとごめん。

俺は花を買い、お参りへと向かう。

はあ……はあ……着いた。

「随分と来なかつたから汚くなっちゃった。ごめんね。来たよ。」

俺は水で墓を上から洗い流し、線香に火をつけ、手を合わせた。

（今は母さんと2人でもやっていけてるよ。たまに同級生の子達が来てくれてとても助かつてる。姉ちゃん。改めて言うけど、俺を大事にしててくれてありがとう。また来るからな。）

ちよつと過去の話をするんだけど。

俺の親は俺が産まれて父親は直ぐに亡くなった。

だから、姉ちゃんと母さんで俺のことを育ててくれた。だから、本当に感謝してる。

ありがとう。

「さて、そろそろ行くね。」

なんか口調が全体的に荒くなっている気がする。

ちよつと直そう。

俺はまだ用事がある。買い物をしなければならぬ。

家には母さんが5ヶ月もいないという悲しみなことが起きている。

「はあ……めんどうかいな」

「ため息ついてどうしたの？」

「なんか悩み事？」

わつ。またびつくりしたよ。さっきの千聖さん並ではないけど。

「いや全然大丈夫だよ。花音、丸山さん、ありがとう。」

「そうなの？でもすごいため息だったからつい……」

最近、あの3人が（花音、千聖、丸山さん）なんもしてこなくなつた。

それが嬉しいんだけどね。

「ううん。全然大丈夫！それじゃあね！」

なんか怖いというイメージがついてしまったのか逃げるように去つた。

「あつ待つてよ和真くくん!!」（私の家に連れてきたかつたのに……）

「かずくんまつて〜!!!」（かずくんを無理やり好きにさせたいなあ）

「ごめん、また今度!!!」

なんとか逃げきれたみたい。

じゃあ適当に買い物をしてるか。

---

とは言つても……何買えばいいんだ。料理なんてたまにしかしてこなかった。それも家にある具材で。

今日は家になんもないという状態だ。弁当などは高い。



「はあ…。」

大きくため息をつく。

「なんかありましたか？」

黒い髪の女の子に声を掛けられた。本日二回目。髪は違うけど。

「いや、なんでもないですよ！」

「なんでもなくない。なんもなかったらあんなに大きなため息つかないよ。」

「たしかに…。」

「ほら。私に相談してみて！」

「とりあえず名前！誰ですか!!」

「あつごめんね。私は花園たえ。君は？」

「俺は戸ヶ崎和真。よろしく。花園さん。」

「おたえね。」

「おたえ。よろしく。」

「で、なんでそんなにため息をついてたの？」

「いや、家になんも具材がなくてなんか買って調理しないといけないんだよね…。」

「そうゆうこと。じゃあ、私が和真の家に行って作ってあげる。今日から毎日。」

「えっ!!そんなのおたえに迷惑だしダメだよ!!」

それは流石にダメだと思うよ。今日初めてあつた人だよ？あれ？最近の人は初めてあつた人にこんなな馴れ馴れしいの？

「和真の目、ぐるぐるしててかわいい。」

かわいい？もうわからない。

「じゃあ、私が今日から作りに行くね。」

うん… もうそうしてもらおう…

「ありがとう。」

「じゃあ早速買い物しよー！」

「はあ…」

俺はさらに大きなため息をついた。何回目だろね。

# 料理人はおたえさん。

なんでこんなことになってるんだらうか？

それは、時を遡ると

）

「これから毎日家行つて私がご飯作つてあげる。」

その日に出会つた少女、

”花園たえ”こと通称おたえに、初めてあつたことにも関わらずに毎日夕飯を作つて貰うというものだ。

）

家に着いた。なんだ… 周りから見れば俺たち夫婦…

いや何でもありません今とつてもなんか圧を感じました。

「なにしてるの？早く入らう？」

いやここ俺の家なんですけど!!!

まあ気にしないでおこう。

「おじゃまします。」

礼儀正しいんだな。

まあこれが当たり前だけど。

「だだいまっと。」

「家来て少しゆつくり探索したいけどもう結構遅いしご飯作っちゃうよ」

「りよ。よろしく」

俺はおたえに作るのを任せ、携帯を手に取った。

メッセージめっちゃ来てるな……誰かな？

紗夜「今度日菜と3人でどこかへ出かけませんか？」

お、いいな。

「了解。また予定が空いてる日がわかったら連絡する」

他は誰だ？…

千聖「あなた今、家にたえちゃん連れてるでしょう？どうしてかしら？」

……こういうのは未読無視で対処かな！

恐怖のメッセージが来ていたのをスルーし、少しおたえの方を見る。

なんか新鮮な感じ。と思う。家に女の子がいるなんてそうそうないからね。

と思っているとおたえがこちらを向き

「和真？どしたの私の事見て。まさか私に惚れちゃった？」

「そんなわけあるか」

「つれないねー。あ、調味料とか適当に使っちゃうよ？」

「うん。任せるよ」

俺には料理の知識というものが１ミリもないからね。

意外とありがたかったのかもしれない。

）

「できたよ」

お、できたか。おたえが作ってくれたのはシチューだ。

こんなに栄養バランスのいい物毎日食べられるのか：：それも手料理で

「美味しそう。いただきます！」

ひと口食べてみる。

ん？なんか一瞬変な味がしたけど大丈夫かな？

そう思ってもう一口食べてみると、特になかった。

気のせいかな？

「うん！めちゃくちゃ美味しい！！」

「でしょっ」ドヤッ

おたえはとても自信を持っている。

「ねえ……和真。」

「なに？」

「うちに来ない？」

「ブツ」

俺はあまりの一言に咳き込んでしまった。

「大丈夫!?!」

「う、うん。大丈夫。それよりうちに来ない？つてどういう意味？」

「いや、和真の食べる姿がうさぎみたいで可愛かったから」

俺はウサギじゃないぜ。

「いかないです。」

「えー来てよー毎日かわいがってあげるから」

「必要ないわっ!」

そんな風楽しくおたえと会話しながらいた。

ふと時計を見た頃にはもう夜21:00だった。

「おたえ、時間大丈夫？」

「大丈夫だよ。けど、そろそろ帰るね。」

こんな時間に女の子が一人で外に出るなんて危ない。それもおたえは結構美人だ。余計に……な？

「遅いし送ってくよ。」

「背中乗せておんぶしてくれる？」

「するか」ペシッ

俺は優しくおたえの頭をたたいた。

「というかどうやって送ろう。」

「歩きでいいんじゃない？」

「そだな。」

話し合って夜道を2人で歩いて帰ることになった。

「おたえ、ありがとな。これからも作ってくれたら嬉しい。」

「ううん。和真に喜んでもらえてよかった!!毎日6時に家に行って作るね!」

「おう、よろしく頼む」

「はい。」

おたえの家に着いた。

「今度は私の家にも来てね!」

「いいなら行かせてもらおうね!あ、そういえば家入るなら合鍵。」

そう言つて俺はおたえに合鍵を渡した。

「これでいつでも家に入れるね。やった」

「夜ご飯作る時以外はあまり入るなよ。それ以外で入る時は言つてな。」

「了解、じゃあまた明日！」

「ばいばーい」

「またね。」

く

「和真。」

なんか怖いのある気がする。無視かな

「か ず ま く ん ？」

「ハイなんでしょうか千聖様」

「随分たえちゃん和仲良くなつたのねえ。」

「はいそうです」

「言いたいことはわかるわよね？」

合鍵か？渡したくないな

「わからないです。」

「わかつてるわよね？」



「はい…」

「いい子ね♪」

俺は千聖に合鍵を渡した。

「これで和真の家に入り放題ね… うふふ」

「なんか言ったか？」

「なんも。」

「はい」

「あ、所でメツセージを無視したこと、忘れてないかしら？」

「知らないですう」

こんな感じで、千聖と2人で帰ってった。

く

次回

もうすぐ進級？

もうすぐ2年生。

早いですね。

学校のことには全く触れてなかった。ていうか知らないもう。

進級の日には衝撃的なことを知る…  
ことはなくもないかも…  
ね

## 感謝と至高の音楽

進級ねえ…

ていうかこの物語展開早すぎじゃない?!?!  
?!!!

まあいいとして。

「千聖、花音、丸山さん。一年間ありがとう。」

「来年も一緒だといいのだけねど…ありがとうね」

「うん。かずくと一年間楽しかったよ！これからもよろしくね！」

「和真くん、クラス離れたとしてもよろしくね！」

「ああ。みんなよろしくな」

色んな人と一年間出会ったけど短かった。

けど楽しかった！これからもよろしく！

これで1年生は終わりか…

来年はどんな人達が来るんだろうか???

とても楽しみ。

あ、そういうえばレオちゃんが言ってたRAISE A SILENのバンドを見に行ってみよう。

プルルルル

「もしもし？れおちゃん？今練習してる？」

「はい！！絶賛やっていますよ！ぜひ来てください！」

「おけ！場所は？」

「〜〜です！！」

「了解！今から向かうね！」

〜〜

「おじやまします・・・」

「パレオ、この男誰よ？」

「お待ちしておりました！和真さん！」

チュチュ様！こちらの方は私を道案内してくれた方です！」

「ふーん・・・ まあいいわ。演奏の邪魔はするんじゃないわよ」

「もちろん。」

ていうかこのバンド、ベースボーカル、ドラム、キーボード、DJしかないけど？

ギターがないのはなぜだ？

「こんにちは。俺、戸ヶ崎和真つていいいます。」

Ba. voの人と、Dr.の人が来た。

「私はレイヤ。よろしく」

「マスクング。よろしく」

「2人ともよろしく。で、なんでこのバンドにはギターがないの?」

「メンバーがいらないの。今探しているんだけど、全く見つからなくて」

「で、それで曲のギターは打ち込みでやってると。」

「Yes!メンバーがいらないのは後で探せばいい。まずはいるメンバーだけで至高の音楽を奏でられるようにするのよ!!」

「無茶かもしれないけど、1曲聞かせてもらってもいいかな?」

「いいわよ。パレオ、マスクング、レイヤ行くわよ」

そうして俺のために演奏してくれることになった。

曲は：“ R・I・O・T”か。



至高の音楽を味わえと

Let me show you

酔いしれればいい

僕らの音は 世界へと憑依する

すごい。このバンドの世界観に引きずり込まれるような感じだった。

「まだ改善点がありそうね。もう一曲やるわよ。」

「もう一曲!?!」

驚いてしまった。だが、やってくれるなら聞いてみよう。

曲は“UNSTOPPABLE”だな

♪

DNA 疼く 赤裸々に

さっきのRIOTとは違って、スピード感のある曲だった。

どちらもロックで、かっこよかった。

「どうかしら? 私たちの奏でる音楽は」

「最高だよ。ちよつと頼みがあるんだけどいいかな?」

「OK! なにかしら?」

「次のオリジナル曲、俺が作詞作曲してもいいかな?」

「歌詞を見てから言うわ。ダメだったらダメって言うから。」

「それでいいよ! ありがとう!」

「あ、そろそろ帰ります! それでは!」

明日の進級式の準備をしないといけない。  
早く帰ろう。

## Season 2

### 2年生になったの?早いね!

今日は進級式。

1年生はめっちゃくちや短かったけれど、2年生はとてつもなく長いような気がする。学校生活についてはあまり楽しまなかったから、

2年からは友達たくさん作ろう!! (フラグ)

「いつてきます。」

俺は誰もいないであろう家に挨拶をすませ、学校へと向かう。

その途中で、毎日夕飯を作ってくれてる、おたえが花咲川の制服を着て歩いていた。(絡まれると面倒だしスルーでいいか。: : )

俺はそう思い横を素通りし、バレてないかな?と思った瞬間、後ろから

「和真♪今日から私の先輩だね♪」

バレています。

バレないと思うやん?

「気づいてるよ?気づかないでも思った?」



ですよねー

「おたえもこの学校なんだな。まあこれからもよろしくな」

一言おたえに言つて、走ろうとする。

そうすると肩を掴まれ

「一緒に行くこうよ」

と言われてしまった。

去年も入学初日誰かとそんなことがあつたな…

「あら、たえちゃん。それにか　ず　まじやない。」

ひいつ！なんで俺の名前のところゆっくりなんだ!?

「じゃ、千聖がいるということでは一緒に行くか…」

「させるわけないでしょう?」

はあ。行くしかないのか。

）

なんやかんやで学校につき、クラスの発表の紙が配られた。

俺は… B組だな。

「千聖、Aだね。」

千聖、花音はA組だ。

紗夜、丸山さんは俺と同じB組。

「仕方ないわね。： 本当は和真と一緒によかったのだけれど。：」

「なんか呼んだ?」

なんか聞こえた気がするけどはつきり聞き取れなかった。

「いいえ。」

「あ、はい」

「もう移動しないと時間ないね。移動しよう」

「そうね。もう時間が無いわ」

また長い話を聞かなければならないのかと思うと絶望する。

みんなも長い校長の話は嫌いだよな、座ってるのが辛い。

おっと中の人の昔のネタはいいとしてB組に向かうか。

「一年間よろしく」

俺はB組に入り、小声で挨拶を済ませた。

俺の席はどこかな。： あ、あつたあそこか。

「よろしく」

隣の人に挨拶。(つもり)

「よ、よろしくお願ひ。：。： します。」

「コミュニケーションかな。まあ、うん。」

「移動するぞー」

「はい」

担任が移動の指示を出し、並んで体育館へと移動する。

「

「……が……だったので今年は新しい気持ちで切り替えてやりましょう」  
なげー。

校長の話って意味あるのかな？

やっと終わったわけだけどさ。

もう二度と聞きたくないね。

「

「1時間目は交流会？なんだそれ」

「あの先生。交流会って何するんですかね？」

「あ、うん。その事なんだけどクラス内で自由に楽しんでていいよ」

えー……クラスに誰一人話せる相手がいらないんですか???

ていうかもうクラスでグループできてるよ。

俺は取り残されて。

あれ、隣の人もいる…

これはチャンス!!

「あの、名前なんて言うの?」

隣の黒髪少女に声をかけてみる。

「わ、私、白金燐子つていいいます…」

「燐子さんね、OK!あ、俺は戸ヶ崎和真。呼び方はなんでもいいよ。」

「か、和真さんですね。よろしくお願いします。」

「うん、よろしくー」

よしっ!

1人クラスで話せる人を増やしたぞ。

これは俺の勇気の切断じゃないか? ( ^ )

「ちなみに、趣味とかある?」

「趣味というか… ピアノと… 恥ずかしいんですがゲームが好きです」

ゲームか。意外だな

「ピアノはよくわからないけどゲームは俺も好きだよ!

あれ、最近やってるNFOってやつ!」

「NFOやってるんですか：?!私もやっています!!」

「お、まじか!!今度一緒にやろうね!」

「はい…!!!」

「あ、連絡取れるように連絡先交換しない?」

「私のは…これですネ」

「了解、追加しといたよ」

「ふふ…嬉しい…」

「なんか友達が出来たみたいだねw」

「そうですね笑」

「あ、同い年なんだから敬語無しでいいよ!」

「わかり…わかった。」

「あははwよろしくね!」

「うん…!!」

く

1時間目が終わり、結局燐子さん以外は話せなかった。

紗夜と丸山さんは他の人とも仲良くできていたように話せなかった。

「和真、友達はできたかしら?いないなら私達が毎時間クラスに行つてあげてもいいの

よ?あ、来てもいいのよ?むしろ来なさい?」

来なさいって強制ですか!

「いや、友達はできたんで。」

嘘は言つてない。

「へえ...それは男?女?」

「ここは女つて言うのと千聖に怒られそうだから

「男だよ」

「嘘ね」

なぜバレた!?

「女です...」

「名前は?」

「隣子さんつて言う」

「ふーん... まあいいわ。あなたも馴染めてるのね。」

「まあね。」

「今度その人見せなさい。」

「なぜ?」

「いいから。元々私たち以外の女とは話さないで欲しいのよ。(ボソツ)」

「はい、なんて?」

「なんでもないわ。」

あ、もう時間じゃん。

そろそろチャイムなるぞ。

「それじゃまた後で」

「ええ。」

〃〃〃

ここから波乱の2年生編がスタートし、彼女たちは色んな人が病んだ気持ちに少しずつなっていくのは、和真も予想をしていなかった。

次回 「幼馴染5人組と和真」

羽丘の人達も沢山出します!

## 羽丘突入と幼馴染5人組?

(あー…：眠い。)

最近、まともな睡眠時間を取れず、毎日このような状態だ。

燐子さんにも目の隈を心配されたが、あまり迷惑はかけたくないので大丈夫、とだけ言っと思った。

今日も”いつも通り”眠い。

さすがに…寝ようかな…

授業中だが、この眠さにはさすがに耐えられん。

おやすみなさい…

「…き…戸ヶ崎！起きろ！いつまで寝てるんだ！」

どうやら俺は空気が薄い存在で、眠ってから1. 2. 3時間目の授業終わりまで気づかれなかったようだ。

「すいません…眠くて…」

「次はないからな。」



「はい」

先生から説教を受けたところで、隣の燐子さんに話しかけられた。

「すみません…。和真さん、ずっと気持ちよさそうに寝てたので

起こしてあげればよかったですかね…。？」

いや、燐子さん、起こさなくてよかった。ありがとう

と言いたいところだが。

「まあ。ありがとう」

とだけ言っというた。

4時間目からは真面目に受けようかな？

そろそろ始まるしな。

く

今日は4時間だけらしく、早く帰れる。

と思っただが…。

さつき寝て怒られて、

「お前さつき寝てたから羽丘高校まで行って書類届けてこい。」

と言われた。めんどくさい。

正直行きたくないが、行かなければやばい気がする。

行く準備をしていると、花音、丸山さん、千聖の3人に声をかけられた。

「和真くん、今日どつかお出かけしない？みんな暇だから」

誘われるとは思ったけど今日は無理なんだな…:

「ごめんね、生憎今日は絶対にやらなければいけない事があるからパスで。」

「そっか…: じゃあまた今度ね!」

「おう、3人ともゴメン!」

「いいのよ。」

「大丈夫だよ」

「うん!」

3人とも優しいな。

なんか裏がありそうで怖いけど。

さて、めんどくさいが羽丘まで行かないといけない。

行くか…:

「

へえ。こんな感じなんだな。

うちの学校とはまた違った学校だ。当たり前だけど。

「あの、すいません 花咲川の制服来た人がなんているんですか?」

黒髪赤メツシユの人に話しかけられた。

「いや、これは色々事情があつて……」

説明をしようとする、赤メツシユの後ろから4人組がきた。

「らん。待つてよ」

「もお！蘭つてば早すぎ！」

「蘭ちゃん早いよ！」

「蘭、少しは待てよな」

友達か？絡まれたくないな、じゃあ行くか

「あの一！なんでここにいますか？」

ピンクの髪の人だ。

「ちよつと教師に頼まれて。」

「そうなんですか！大変ですね。私、上原ひまりつて言います！

ひまりつて呼んでくださいね！」

「ひまり。よろしく」

あれ？これ自己紹介始まるパターン？

「あたしは美竹蘭。よろしく」

「美竹さんね、よろしくー」

「あたしは宇田川巴。よろしくな!」

「宇田川さん、よろしく」

「私は羽沢つぐみです!よろしくお願いします!」

「羽沢さん、よろしくね!」

「あたしはモカちゃんだよ〜よろしく〜」

「モカちゃん、よろしく」

「この5人組と挨拶をすませ、もういいだろと行こうとすると

「あの一!学校案内しましょうか?」

ひまりに言われた。

「いいのか?早く帰りたいんじゃないの?」

「全然!みんなもいいよね?」

「いいよ。(さんせー)。(ああ!)(もちろんだよ!)」

「よし、それじゃあレッツゴー!」

こうしてこの5人組と羽丘内に行くことになった。

↳

校内を6人で話しながら歩いていると

「和真!!来てたんだー!」

氷川紗夜の妹、日菜だ。

「おう、日菜か。」

どうやら、日菜はこの学校らしい。

「どうしたの？」

「いや、色々事情があつて今この5人に案内してもらつてる。」

蘭達に視線を向ける。

「ふーん……じゃあまたね！また遊ぼーね！」

「うん、じゃあねー」

「あの、和真さんっていうんですか？」

「あ、俺自己紹介忘れてた。」

戸ヶ崎和真つて言います。よろしく」

自己紹介をし、学校のことについて教えて貰った。

どうやらこの5人は1年生らしい。

意外だ。

そう話していると職員室へ着いて、目的の資料を渡した。

「

よーし目的も果たしたしじゃあこれ……」

「この後、みんなでファミレス行こうよ！」

ひまりがこんなことを言い出した。

「いや、行か…。」

「もちろん和真さんも来てくれますよね？」

「うん！もちろん！」

だめだ。行かないって言えなかった。

く

「そういえば、私たちバンドやってるんですよ！」

意外だな。

普通の仲良し5人組かと思ってた。

「私たちは幼馴染5人組で、

蘭が中学の時1人だけクラスが別になっちゃって。

それでみんなでいれる方法はないかって言ったら、つぐが、「バンドやろう！」て

言ってくれて。」

なるほどな、相当仲がいいんだな。

「バンド名とかあるの？」

”Afterglow”です！」

「… いい名前だね」

「よかったら、この後練習あるので見に来ませんか？」

羽沢さんが練習に誘ってくれた。

「いいの？ いいなら行かせてもらおうけど」

「まあ。いいけど」

「もちろんいいですともー。」

「ああ。最高の演奏見せてやるぜ！」

「張り切っちゃうぞー！」

「ぜひ来てください！」

こうして俺はAfterglowの練習を見に行くことになった。

どんな演奏を見せてくれるのか楽しみだ。

# いつも通りと最悪なスタート

「練習、見に来ませんか？」

1人の女の子からそう声をかけてもらった。

幼馴染5人組で結成したバンド、

”Afterglow”だ。

今までバンドはあまり見てこなかった。

RAISE A SUILENとAfterglow、高校生になってからは2バン

ド目だ。

「みんな、いつも通り行くよ。準備はいい？」

美竹さんがメンバーに声をかける。

このバンドはどんな演奏を見せてくれるのか。

「おっけー(うん！)(いくぜっ！)(やるぞー！)」

「聞いて。あたしたちの歌。」

That Is How I Roll!

♪



僕は僕（僕で）

君は君（君で）

生きよう

say! "That is how I roll!"

このバンドもロック系か。

いいな。

「どう？あたし達の歌。」

「とてもよかったよ。けど、もうちょっと改善すれば、

もっと良くなると思うよ。」

そう言っつて俺は唯一できる楽器、ギターを貸してもらおうとした。

「モカちゃん、ちよつとギター借りてもいいかな？」

「いいですともくけど、モカちゃんのギターを使うのは高いですよ。」

「高いの!?!けど、一旦借りるね。」

「ふふふー。」

「モカ、冗談は程々にね。」

「わかりましたよー」

「OK。じゃあ、ちよつとやってみるから、聞いてて欲しい」

♪

(すごい……こんなにできるんだ)

(おー……モカちゃん感激～)

(すごいです!!!和真さん!)

(すごいな、モカも凄いが、戸ヶ崎さんも凄い。)

(できるの意外……とつても上手!!)

「と、こんな感じかな……?ん?みんなどうしたぼーつとして」

「いや、和真さんの演奏が凄かったから……」

「ギターやってみましたか?あれでやってないって言ったら疑いますけど」

「うん、少しだけ。昔にね……」

もう思い出したくないことだ。

今に向き合うんだ。

「あつやべ!俺もう帰らんと人任せてるから帰るね!それじゃー!」

「あ!連絡先!」

「ごめん!そこに紙置いといたからそれで登録してー!」

「ありがとうございました!!」×5

アフグロの練習を見終わったところで、時間はもう6時だ。

早く帰らないとおたえが家で待っているはずだ。  
急ごう。

その頃のアフグロ

「和真、演奏すごかった。」

「蘭が褒めてる。まさか惚れちやつた〜?」

「モカ! 変なこと言わないでよ! / /」

「照れてますね〜ひゅーひゅ〜」

「あはは。ていうか、あたし達もそろそろ帰ろうぜ。」

「だね! もう時間もあれだし!」

「嘘!?! もうこんな時間なの!?!」

「早かったな。」

「それじゃあまたあした!」

「ばいばーい」

「また明日!」

「じゃあな!」

「また明日。」

く

「ただいま。」ガチャ

「おかえり〜遅かったね〜なんかあったの？ご飯できてるよ」

「ちよつとバンドの練習見てたらこんな時間になった。」

「まあ色々あるねー。和真も大変だね。」

「うん、お疲れモード。」

「お疲れ様。じゃあご飯食べよつか。」

「いただきますー！」

く

次の日

「アイドルバンド？」

「そうよ。彩ちゃんもいるわ。」

「そのライヴが今日あるから来いと。」

「あら。話がわかるのね。来なさいね。」

「行きたくないです帰って寝たいです」

「私の姿を見たくないの？」

「みたくない。」

(♪#^?^)

「見たいですめちやくちや見たいです」

「そう♪じゃあ来て。」

まず、アイドルバンドなんてそうそうないよな？

なんか色々心配だけど… 気になるのもあるな。

とりあえず6時間目までが長い。

早く終わらないかな。

）

「終わったー！」

やっと長い学校が終わる。

けど今日は千聖や丸山さんがいる所のライブを見に行かなければならない。

千聖によると

「この会場の舞台裏に来て。特等席で見せてあげるわ。」

とのこと。

普通アイドルの舞台裏なんて行けないけど軽く誘ってくれた。

「……かな？」

ライブ会場に着き、千聖から言われた場所へと行った。

「失礼します…。」

誰もいない…。？おいおいまずいんじやないか？

「不届き者ですか!? 私が成敗します!」

入ったらいきなり声が出た。忍者か? この人は!

「ちよいちよいストップ! 俺は怪しくないから。」

千聖とかに誘われてここに来た。」

「そうなんですか。いきなりすみません。」

「まあ。大丈夫だよ」

「それより、自己紹介が大事です!

私は若宮イヴと申します!」

「若宮さん。よろしく」

俺は戸ヶ崎和真。」

「トガサキさんですね! よろしくお願いします!」

「他の人達はいないの?」

「そろそろ来ると思います!」

「失礼します」

「あれ? 日菜!! なんでここに?」

「和真じゃん! なんで和真こそここに?」

「千聖に誘われて。」

「ええ。私が誘ったのよ」

「か、和真くん！来てくれたんだ！」

「ま、まあ。あ、その人、俺は戸ヶ崎和真って言います。よろしくです」

「あ、ジブンすか？ジブンは大和麻弥っていいいます！よろしくです！」

上からでも下からでも同じだな。

「パスパレの皆さん、そろそろ出番です、よろしくお願いします」

スタッフさんから声がかかり、本番らしい。

このバンドはどんな感じなんだろうか？

「みんな頑張ってる」

「頑張る！（頑張るわ。）（頑張っちゃおうよ！）（頑張りますよ！）（頑張りますよ！）」

（今日は演奏無しのだけだね…）

そう、今日は口パク、演奏はしない。

「こんにちはー！私たち、」

「「「「Pastel? Palettesです！」」」」

「まずは1曲、聞いてください！しゅわりん どりーみん」

演奏がスタートした。

スタートしたのはいいものの、なんか演奏も、歌も

全くズレがないことに疑問を感じた。

とその瞬間に

機材ミスで、演奏が完全に停止してしまい、演奏をしていなかった事、さらに歌っていなかった事が分かってしまった。

「おいおいあれ口パクだったのか…?」

「結局こんなんつしよアイドルなんて」

客席から様々な声が聞こえる。

そこで千聖が、

「機材のミスがありました！ 私たちはまた演奏するので、応援よろしくお願いします。」

そうして、このバンド、「Pastel? Palettes」は

最悪のスタートを切ってしまったのだ。



## 新たに

パスパレのライブを見に行った。

しかし、口パクであり、演奏もしていなかった。

これはさすがにどうかと思ったが、彼女たちも望んでやった訳では無いだろう。

↳

昨日の一件から、クラスでの丸山さんがすごく悲しそうだ。

教師に指名されても、反応を示さずただ窓を見ているということも

あった。

「丸山さん、丸山さーん！」

俺は丸山さんに寄って声を掛ける。

何回か呼びかけてやつと気づき、

「ひゃーひゃい!!どうしたの?和真くん」

「あ、驚かしてごめん。それでパスパレの件なだけどさ、結局この後どうするの?」

丸山さんの顔がさらに暗くなっていった。

「あの後、スタツフさんからしばらくライブはできないって言われたの…」

そりゃ落ち込むわ。それほど楽しみにしてたんだな

「けど、見返すにはちゃんと演奏して歌うしかないよ。」

「だよね…！私、頑張るよ！」

「うん！何かあったら俺にいつでも言つてな！俺は丸山さんのこと信用してるし好きだよ！」

「す、好き!?／＼ありがとう…！頑張る!!／＼」

「じゃまた後で〜」

おっともう帰宅だな。

それでは帰って買い物にでも行こう。

今日はおたえが来れないらしい。

ま、食べなくてもいいかもしれないけどなんか買いに行こう。

〜

俺は駅前のコンビニで晩御飯を買うことにした。

生憎雨が降っていて、出かけたくないが腹も空いているので行くしかない。

雨結構強いな。走るか

傘って指しても濡れるよね。え、俺が下手なだけ？

よし、着いたな。

「いらつしやいませー」

俺はコンビニに入り、晩御飯を何にするか考えている。

セブンだったらスパゲティサラダなのだが、ローソンだ。

とりあえずおにぎりとお茶安定だな。

そして今日のメインは何にしよう。

・・・ そうだ！カップ麺にしよう！

俺はカップ麺を取り、レジに向かつてる途中、レジ横にあるＬチキに反応してしまい、買った。

「ありがとうございますましたー」

今日はめつちや買ったな。早く帰って食べよう。

「・・・ お願いします！受け取ってください！」

なんか声が聞こえる。聞いた事ある。

そしてその声が聞こえる方向に行ってみると、パスパレのボーカルであり

俺のクラスメイト、丸山彩だった。

どうやらパスパレのチラシを傘もささずに配っている。

さらにその近くには白鷺千聖がいた。

これは見過ごせないと思い、さつき入ったコンビニにもう1回行き、傘を買って2人に渡そうと思った。

「お願いします! : : : って和真じゃない! どうしてここに! :」

「いや。コンビニ行つてご飯買おうとしたらこの感じ。見過ごせないでしょ」  
「別にいいのよ : : : 私たち個人でやってるだけだから」

「そんなこと言わずに。ほら。丸山さんも」

2人に傘を差し出す。

「こんな所にいたら濡れて風邪ひくわ!

「ありがとう!」

「うーん。その、チラシ配るの俺も手伝ってもいいかな?」

「やってくれるの! :」

「まあ、パスパレとしてのライブ、また見たいから」

「 : : : !! わかった! お願いします!」

「お願いするわ。本当にありがとう」

「任せとけて」

その後もずっとチラシを配り続け、さすがに暗くなってきた。

「2人も、そろそろ帰ろう。このままだと危ない。」

「でも…」

「自分の体が壊れたらパフォーマンスもできなくなるぞ。いいの?」

「!!うん!!」

「と言つても今から個人で返すわけにも行かないし…俺の家に来るか?」

「えっ!!?/?」

「いいのかしら?/?」

「うん、全然。なんで照れてるの?」

「それじゃあ行こう!/?」

「ええ。行くわよ/?」

「ん?」

わからなかった。

）

「お邪魔します。」

「へい、誰もいないから全然気にしないでね、あ、お風呂使つていいよ。2人が使えそうな服、一応出しとく。」

「ありがとう!じゃあお風呂使おうね!」

「彩ちゃんの後に私も使わせてもらおうわ。」

「へい。飯食うわ。いい?」

「いいわよ。それより、お茶か何か貰っていいかしら?」

「おけー」

千聖と二人って言うところの事思い出すよな。

もうさすがにそんな千聖じゃないとは信じてるけど。

ていうかあの薬、なんだ?

変なもの入ってないよな!!?!

「何かしら?」

「あ…いやなんでも」

「そう。」

「千聖ちゃん!上がったよ!和真くん、お風呂ありがと!」

「じゃあ使わうわね。」

「おけい!」

ていうかしちキ冷めてもうまいな。

さすがローソン。

お茶も美味い。

お茶はローソン関係ないか。飲んでるの爽○美茶だし

「ねえ。和真くん。」

「ん？どうしたー？」

「私、和真くんのこと好きだよ。」

「なっ……いきなりだな笑」

「私は本気だよ？」

そうすると俺にキスをしてきた。

「……はあ……いきなりだね……」

「みんなに取られないように、狙っちゃうからね。」

私だけを見てて欲しいな……他の女は見ちゃダメ。」

丸山さんが怖いセリフを言いながら近づいてくる。

「あと、丸山さんじゃなくて、彩って呼んで。」

「うん、彩。」

「それでよし♪今度は逃がさないからね」

「上がったわよ。2人ともどうしてそんなに近いのかしら？」

「あつ／＼ごめんね！なんでもないよ！」

「なんでもないです。」

「ふーん。まあいいわ。」

この後3人で色々話して、遅い時間になった。

↳

「そろそろ帰るわね。それじゃあ。」

「またねー！」

「うん、また」

ガチャン

「まあ…悪くないね。」ドスツ

俺は疲れてしまったのかそのままベッドに倒れ込み、すぐに寝てしまった。

良かったのは明日が土曜日だと言うこと。

休みでよかった。



## 暴走彩ちゃん

朝5時。昨日は疲れてしまったのか風呂にも入らずそのまま寝てしまった。少し汚いな。

とりあえず、風呂入ってもう一度寝よう…。眠い。

…パスパレ大丈夫かな。

俺は四六時中パスパレの今後について考えている。

大丈夫だと思いたいのだが、どうにも心配してしまう。

まあ、あれだけ呼びかけたんだ。彩たちもやってくれるはず。

風呂に入りながらも、パスパレについて考えていた。

「よし。上がり」

俺は15分くらい風呂に入り、そろそろ出ようとした。

「やむっ!!」

風呂から出た瞬間、俺の体にとてつもなく寒い風が来た。

もう冬なの？

まだ6月だよ？（今この物語では!!）

ていうか今日は疲れも溜まってると一日ゆっくりしよう。

別に誰とも会う予定は無いしな。

髪を乾かし、歯を磨きもう一度ベッドに入った。

「おやすみ。」

）

13:35分

「和真くん、起きて！起きて!!」

誰かの声がある。昨日も聞いた。

「ん…まる…彩。なんでいる。」

おかしいでしょ！なぜここにいるんだ??

「昨日和真くんの家出る時に鍵が置いてあったからついもらってきちやったテへ」

「テヘじゃないわ！別に鍵はいいけど取る時言つて欲しかった!」

「え、そこ？意外だね」

「まあ。許す。」

「ふんふーん♪」

「ていうか、昼食食べた？食べてないなら何か作るけど」

「いいの？実は何も食べてなくて…」

「おけ。なんかリクエストある？作れるもの限られるけど」  
「ん〜。」

「あ、ちなみに作れるものはオムライス、卵焼きくらいだぜ！ドヤ」  
「それ自慢になってないよ！」

「そ、そうか：.：」

「オムライス作ってもらってもいいかな？」

「もちろん！まかせて！」

「おけ！作るぜ！」

「できたよー」

「ありがとう〜！美味しそう！！いただきます！」

「うん、俺ちよつとトイレ行ってくる。」

「はーい！」

彩

わ〜!!

和真くんの手料理!!!

作れる料理は少ないって言ってたけど、本当は作れるんじゃないかな？

「トイレ行つてくる。」

和真くんがトイレに行くみたい。

…今しかないよね。

私はバッグから睡眠薬を取り出して和真くんの料理の中に入れた。

……………ふふふ。もうすぐ私のものになるね……………

沢山可愛がつてあげるから♪

「戻つたよーつて ん？どうした彩。すごい笑顔だね」

「いや？なんでもないよ！」

「そう。じゃあ食べよ。」

「うん！」

く

「なんか… さつき起きたばかりなのに眠くなって… きた」

「ふふ… おやすみなさい♡」

「彩…」 z z z .

く

彩

「寝顔も可愛いね♡さてと、まずはこれからやろうかな…。」

私はバッグに入ってた紐を取りだし、和真くんをベッドの上で縛り付けた。

そして、和真くんの隣で寝て、頭を撫でてあげる。

「かわいいね…♡」チュッ

和真くんの頬にキスをした。たくさん。

まだ起きないみたい。

ていうか、眠いから、私も少しだけ寝ちゃおうかな。

おやすみ♡愛しの和真くん♡

く

「んー。よく寝た気がする。ていうか、なんか腕が動かないんだけど？」

よく見てみると、縛られていた。なぜだ!?!と思ったが、そんな事できる人は先程まで

いた丸山彩のみだ。因みに彩は今どこにいるのかと言うと俺の真横だ。

気持ちよさそうに寝てる。

「おーい。彩。起きろー。」

「む…あ、和真くん。起きたんだ。」

「これ解いてくれ。」

「やだ。」

「なぜ!？」

「今からイイコトしよ。」

「やだ!奪われる!!!誰か助けて!」

俺は必死に抵抗した。が

「うるさい口にはこうだよ?」

彩はそう言つて俺にキスをしてきた。

長いと思つたが、彩が舌を入れてきた。

「んっ… れろっ… はあ… んっ」

エロいが今はそんなことを思つてる場合ではない。

「はあ… はあ。彩、こんなことやめよう」

「もう私は止められないよ。じゃあ、しよう?」

そう言つて彩は服を脱いで、下着姿になった。

「やだあ…」

「ふふっ♪怯えてる姿も可愛いよ」

俺の服も脱がしてきて、お互い下着になった。

あーもうこれ終わりました。腕を縛られて抵抗できない。

そう思つていた時。ガチャンと音がなり、家のドアが開いた音がした。

誰だ!?!しかし、時間がわからないが外も暗くなっているので、おたえかもしれない。そう思い俺は

「おたえ!こつち来て!」

「和真?どうしたの?」ボタン

「あつ...」

「何してるのー?!」

この状況にはおたえもびつくり。そりやそうだ。

お互い下着で俺は縛られている。

おたえが来たようで、彩も正気に戻り、

「あつ!!ごめん!今すぐ解くね!」

なんだろう?暴走してたかな?

「おたえ。ありがとう。来なかつたらやってた。」

「やる?なんかしてたの?」

「いや、なんでもない。」

「それより、和真くん、ごめんね。いきなり襲ったりして」

「大丈夫。本気じゃないって信じてるから。」

「うん...♡」

「えっと。この方は誰？」

「おたえは知らないか。俺と同じクラスで、パスパレっていうバンドやってる。丸山彩さんだよ。」

「ふーん。私は花園たえ。彩先輩だね。」

「たえちゃん、よろしくねー！」

とりあえず一件落着か…？

「おたえ、3人分ご飯作れる？」

「うん、食材には余裕があるから作れるよ。」

「おけ。彩、食べていって。」

「いいの？迷惑じゃないかな？」

「大丈夫。」

「それじゃあお言葉に甘えて…。」

「やつぱり和真くんは優しいなあ…。」  
♡」ボソツ

「なんか言った？」

「な、なんでもないよ！」

「えい。それならよし」

こうして俺の波乱な土曜日は幕を閉じようとしていた。



## Season 3

Roselia×RAISE A SUILENの合同  
ライブに来てみた。(特別編)

「湊友希那。私達とライブをしなさい！」

事の始まりはその言葉からだった。

RAISE A SUILENプロデューサーでありDJの、チュチュ。

この言葉から合同ライブが決まった。

「いいわよ。頂点の歌を、聞かせてあげるわ。」

「最強のRAISE A SUILENが爆誕する！」

く

「という訳で、和真。あなたに来て欲しいわ。」

俺は友希那にその合同ライブとやらに来いと言われた。(強制)

「どういう訳。」

「そういう訳よ。いいから来なさいね。」

今回は2DAY開催されるらしい。

俺は2日分のチケットを渡された。

ていうか席これプレミアム席だよね。

なんでこんな高いものを…

「ちなみに来なかつたらどうなるか。わかるわよね？」

「はいわかつてます向かわせてもらいます」

「そう。楽しみにしてて」

まあ楽しみではあるけど。どんなパフォーマンスなのか。

Roseliaのライブを見るのは何回目だろうか。

「ゆつきなく！お待たせ〜！あれ？和真もいるじゃん！」

「今井さん！早いです！それと…そこにいるのは和真さんですか？」

「リサねえ早いよ〜!!」

「今井さん…早すぎです…」

Roseliaメンバーが全員来た。

「リサ、みんな疲れてるぞ。」

「あはは〜！ごめんごめん！ところで和真、なんでここにいるの？」

「いやまあこの方に呼ばれてライブのチケットを渡されました。」

「あなた達も和真が来れば頑張れるでしょう?」

「わ、私は最高の演奏ができればそれだけで十分です!和真さんが来てくれるならもつと頑張れますけど。」(ボソツ)

「和真も見に来るなら、張り切っちゃうよ!」

「あこ、かつこいいところ見せたい!!」

「頑張ろ!あこちゃん!和真さんにいいところ見せます。」(ボソツ)

「紗夜、燐子。何言ってるのか聞こえないわよ。」

「同感。最初しか聞こえないよ。」

「な、なんでもありません!(ないですよ!!)」

「ならOK。2人とも可愛いんだからもつとハッキリしないと!!」

「かつかわ!! / /」

「かわいい!和真さんに言われるなんて! / /」

「和真?ちよつと今の言葉は優しいおねーさんでも見逃せないなあ☆」

「え?なんか言った?」

「熟鈍感なのね。まったく。」

「ねえねえかずにい!あこは?」

「うんもちろん」

「やったー!!」

「カズマクン?」

「ぎゃーやめて!!!来ないで!!!」

この後悲鳴が響き渡ったと言う。

）

合同ライブ当日

「ここかく。結構広いんだな。物販も人が多い。」

会場入り1時間前と余裕できたので、少し暇になった。

(へー。たくさんグッズあるんだな... やっぱり人気なのかな?)

Roseliaは頂点であり、RAISE A SUILENは最強のサウンドを奏でる。

らしい。(らしい。)

ていうか、トイレどこ?と思ったが、トイレに行ったら、外まで行列ができていた。約50分、そこで待たされた。

けど、することも無かったので丁度よかった。

）

開演だ。

さあ、どんなパフォーマンスを見せてくれるかな？

先行は Roselia だ。

1曲目は「R」。

そこから10曲ほど歌い、

10曲目は、「ONENESS」。

そして Roselia の版が終わった。

次は、RAISE A SUILEN のターン。初めて現場で見る。

1曲目は

「DRIVE US CRAZY」。

名の通りクレイジーな曲だ。

そしてRASのラスト、「EXPPOSE, Burn out!!!」で過去一に騒いだ。

こんなに盛り上がるのは久々だったかもしれない。

そしてアンコール。Roselia とRAS がコラボの

「BLACK SHOUT」、「R・I・O・T」

を披露し、一日目は幕を閉じた。

）

終演後

「どう？ 私達のパフォーマンス。」

「最高だったね。友希那、いつもよりめちやくちやかっこよかったよ。」

「あ、ありがとう：：／／」

「紗夜の弾いてる姿。かっこよかった。」

「ええ。ありがとうございます。」

「リサとあこ、燐子もみんな。」

「「ありがとう！（ございます）」」

「じゃ、そろそろ俺は帰るね！」

「え？今日は私達と一緒に泊まりよ♪」

「え？そんなの聞いてないですけど。帰ります」

「帰らせないよ☆捕まえちゃうもんね！」

俺はリサに背中から乗られ、擦られた。

「やめ！リサ！やめてー！」

「ほらほら〜♪」

いや、あれが当たってるって！

「今井さん！羨ましいです！（やめてあげなさい！）」

「紗夜、本音と建前逆！」

「あこも乗るー！」

「ちよまであこ来るなー!!」

「災難ですね… 和真さん。抱きしめてあげます…」ギョツ

「り、りんこ?!」

「ふふっ…」

「和真。ちなみに私と一緒に寝るわよね？」

「いや、一人で寝ます」

「5個しかないのよ。残念ね」

「なんでー!!!」

こうして合同ライブ一日目は幕を閉じた。

## 合同ライブ RASの場合

昨日は楽しかったが疲れた。

なぜそんなに疲れてるかって？誰も聞いてないだろうけど言うよ。

ライブは楽しかった。そこから帰ろうとしたけどRoselliaのメンバーにお泊まりを強要された。

「私と寝てくれないのかしら？」

などと言われ、さらには枕投げに強制参加させられた。

こんなので2日目大丈夫か…??

しかし今日はRASのリハーサルも見に行く。

よし、向かうか…

）

「遅かったわね！和真！」

「ごめんごめん、ちよつと疲れちゃって」

「まあいいわ。それじゃあジャンジャン行くわよ」

RASのライブは完全ノンストップで行く。



すげー疲れるよ。

「どうかしら?」

「うん、いいと思う。けどレイ、少し休憩した方がいいんじゃない? 声が少し疲れてる気がしたよ。」

「ありがたい。けど、最高の演奏を届けるにはもつとやらないと。」

「自分の体が壊れたらパフォーマンスもないぞ。」

「…! そうだね!」

「うんうん。なら少し休憩しよう!」

「少し休憩したらまた直ぐにやるわよ!」

やっぱスゲーなRASは。

無駄な時間を使わないんだな。

「おーい。今日差し入れでケーキ作ってきた。食べるか?」

マスクングだ。この人が作るものは美味しい。

「1つもらうね」

俺はマスクングが持っているのを1つ貰った。

「どうだ? 今回は結構自信作だ」

「うん。めっちゃくちゃ美味しいよ。」

「まあな！」

「さて、食べ終わって休憩したことだし、そろそろ再開しよう！」

この後も順調にリハーサルが続き、無事に本番を迎える。

）

昨日と席は少ししか変わらない。

Roseliaメンツは俺を見つけるとめっちゃ意識してくる。なんで？

RASメンツは大丈夫みたい。

お、始まるな。

今日はRAISE A SUILENからのスタートだ。

1曲目は、幕上げから同時に

「Invincible Fighter」だ。

サビでタオルを回すのが楽しい。

DAY1ではやらなかったなので、以外だったけれどもここで聞けて嬉しい。

そこから10曲。

10曲目は

「DRIVE US CRAZY」。

ラストにもってこいだな。

そうしてRASの番が終わり、幕間映像がある。

そしてその幕間が終わり、Roseliaの番だ。

いきなり、1日目に初披露の

「Legendary」

だった。

途中のRinggling Bloomで、少し歌詞のミスがあつたが、多少は仕方ないと思つた。

そして10曲目は「FIRE BIRD」。

さらに「R・I・O・T」と「BLACK SHOUT」を披露し、

合同ライブは幕を閉じた。

）

「和真!どうだった? 私達の最強のライブは!」

「よかったよ!」

「当たり前前よね!」

「チュチュ様!」

「なに? パレオ」

「今日は和真様と私達でどこか行きましょう！」

「ん？」

「お、いいな。」

「ライブ終わりだしリラックスしたいよね。」

「行こう！」

「あわわ！けど少し楽しみ！」

「和真さん、行きませんか？」

「まあ。ていうかどこに行くの？」

「それは今から考えるのよ！」

「いや決まってるのかーい。」

「まあRoseliaより安心できるメンバーだよな。」

「これくらいなら全然楽しいし。」

「ラーメンとかどうですかね？私、この辺にある美味しい所知ってるんで！！」

「ロック、そこ行くわよ！教えてちょうだい！」

「は、はい！」

「よし、じゃあ出発〜」

「こうして平和に終わった。（はず。）」